

「大館教育ブランド OKB48」

大館市教育委員会 教育長 高橋善之

ふるさとキャリア教育を展開して7年、大館には北海道から沖縄まで多数の教育関係者が視察のためにお越しになる。同時に、私自身や大館の教員が他地域に出向く機会も多くなった。それにつれて、私たちが自覚してなかった大館の教育の独自性や先進性が浮き彫りになって見えてきたのである。そこで、2年前に「大館教育ブランド」と称して列挙してみたら20項目となった。その後、改めてその価値に気づいたもの、発展的に分化したもの、新たに創造されたものなど次々と加えた結果、ついには48となった。

大館教育の特長は、これまで「個人主義的価値」一辺倒であった教育目標を、パブリックな方向へと変えたこと（未来大館市民育成「IからWeへ」）。また、それまで関わりが薄かった一般行政・民間企業・地域社会などと合目的に連携を深めたことにある（コンセプト「大館盆地を学舎に、市民一人一人を先生に」）。その連携・融合により、エネルギーが増幅し、新たな価値や活動が生まれ、広い分野に多様なブランドが誕生した次第である。現在、これら一つ一つが大館の教育を形成する血肉となり精神となり、なお自然増殖を繰り返しながら進化又は深化を続けている。

これが大館が誇る「大館教育ブランド OKB 48（オーケイビー フォーティエイト）」である。

大館教育ブランド OKB48

- ①「新指導要領」が指し示すベクトル上の、さらに7年先を進行する**大館 ふるさとキャリア教育**
- ②「坂の上の雲」をめざし、希望の灯を掲げ、協働力をもって未来への道を切り拓く**教育による地方創成**
- ③全国トップレベルの学力・体力・人間力を身につけ、自立の気概と能力を備えた**未来大館市民**
- ④ハイレベルの数値的学力のみならず、未来大館市民基礎力・実践力を培う**おおだて型学力（A・T・TW）**
- ⑤全小中学校の代表で組織され、学校・地域や被災地への貢献活動を主体的に展開する **子どもサミット**
- ⑥「0～22歳＝幼・保・園→小・中学校→高校→地元大学」までをFC教育で貫く **大館型一貫教育態勢**
- ⑦子どもたちの発信する希望が地域社会・産業界に循環し、新たな価値と活力を生む**学社融合連鎖反応**
- ⑧実績1万件突破、子ども達の夢を体験を通して実社会や産業界へとつなぐ全国初の**子どもハローワーク**
- ⑨全小中学校が、それぞれの地域・学校の特色を活かして「未来人財」を育む **FC教育 百花繚乱作戦**
- ⑩未来の大館に不可欠な職と人財を、行政機関・産業界と連携し計画的に育成する**未来人財プロジェクト**
- ⑪スクール・コミュニティを形成し、地域の元気発信基地たる役割を果たす**城西CS+地域学校協働活動**
- ⑫「教師主導型授業禁止令」を発令、全教員が子ども主体の授業イノベーションに挑む **教学から響学へ**
- ⑬「共感的学び合い」を核として、「深い学び」に至る学びを探究する **学びの交響学（ソフィー）**
- ⑭「話しあい・磨きあい・認めあい・助けあい・深めあい」による **学び・あいの五段活用**
- ⑮「あいうえお反応」「ハンドサイン」を常態化、「シンカタイム」を導入した **大館版7クイズ・ラーニング**

- ⑩学習塾利用率（小6＝18% 中3＝17%）、小1から自学力・学習習慣を身につける **家庭学習ノート**
- ⑪志高く、学校経営力・行動力・変革力・協働力を備えた全国一先鋭的な **大館市校長会**
- ⑫適材適所の結果、教育委員2/5、校長・教頭とも3割、市教委課長級3/7を占める **女性管理職パワー**
- ⑬「非行ゼロ」、「不登校出現率最少」を実現し、高い社会性・規範性を培う **凜として爽やかな生徒指導**
- ⑭「少年相談センター」が核となり、専門チーム・学校と協働し、困難な事案も解決に導く **OCSRT**
- ⑮不登校児童生徒の大半をケアし、学校復帰・高校進学への道を拓く **おひとり教室・スペースイオ大館**
- ⑯予防キャンペーン、きめ細かい早期発見システム、徹底した早期解決態勢による **いじめ防止システム**
- ⑰「一人たりとも置き去りにしない理念」で、組織的な支援を実現する **どこでも・だれでも支援教育**
- ⑱「学校教育課・子ども課」連携、「満5歳すてっぷ相談」など先進的な **早期からの相談・支援システム**
- ⑲「学校教育課・子ども課」連携、乳幼児期からの育ちと学びの土台をつくる **就学前教育指導体制**
- ⑳5つの「きょうどう力」をもって改善を重ね、全国をリードする **学校事務 おおだて型共同実施**
- ㉑大館の教育マスコット、「あいさつ運動」「はちくんダンス」も指導する **大館市教委指導主事 はちくん**
- ㉒市教委・福祉部の協同推進により、全保育園児・小学生・高齢者も踊る **ワンだふるはちくん♪ダンス**
- ㉓「生涯学習課」発「公民館」経由、市民の市民による市民のための **市民版ふるさとキャリア教育・活動**
- ㉔「ひとづくり」から大館の未来を拓く「市長部局&市教育委員会の協同未来戦略」 **大館市総合計画**
- ㉕4年連続「給食費未納者0」、「自作曲げわっぱ飯器」「地場産物給食」を推進する **大館 ワンだふる給食**
- ㉖手あげ方式、こども園から小中高大、行政機関まで実践を発表し互いに学びを深める **教育実践発表会**
- ㉗「ふるさとキャリア教育」の振興・人財育成のために未来投資する **佐々木教育振興基金（1億円）**
- ㉘大館市が独自に制定した **授業マイスター認定制度**、**チャレンジ授業賞・ふるさと授業賞 表彰制度**
- ㉙「歴史街づくり」と連動し、郷土の歴史・文化への理解を深め、誇りを高める **ふるさと学習（郷学）**
- ㉚将来的な全国・世界との交易の拡大推進を見据え、疑似体験授業を通して経済的センスを磨く **経済教育**
- ㉛総理大臣表彰1、文科大臣表彰7、博報賞3など、6年間で20の団体受賞を誇る **全国表彰歴**
- ㉜北海道から沖縄まで、全国の教職員や教育系大学生の研修視察等を広く受け容れる **大館教育ツーリズム**
- ㉝「返還免除型医学生奨学金」など、「ふるさと未来人財」への経済的支援を保障する **大館型奨学金制度**
- ㉞「はちくんワンダフルイングリッシュソングス♪」で英語に親しみ、フォニックスで音を文字へとつなぐ **小英語 大館スタンダード**
- ㉟WRO 全国大会2連覇の実績、ロボット・ドローンの操作を通して身につける **最先端 70分ミツ教育**
- ㊱道徳教科書掲載の「曲げわっぱ」教材や、地域素材を活用し「大館市民人間力」を培う **ふるさとの道**
- ㊲小1から中3まで継続し、自らのキャリア・ボランティア活動履歴を記録する **キャリア・パスポート**
- ㊳FC 教育テーマソング「未来へ歌を歌おう」はじめ、各校で愛唱される **オリジナル・スクールソング**
- ㊴「駅弁大將軍」に輝いた大館産駅弁を、キャリア講話とともに全小中学生に提供する **鶏めし弁当給食**
- ㊵「街の人にあいさつを」をスローガンに、小中高生が街中に元気を発信する **あいさつ+α運動**
- ㊶中堅世代の実行委員会と小中高生千人のボランティアで創る、北東北一の食の祭典 **きりたんぼまつり**
- ㊷スポーツ大会、作品コンクール、技術コンテストにて、全国トップレベルに達する **大館アスリート**

雑 感 ～教職員研究実践発表会に思うこと そして…～

大館市校長会 会長 永 井 孝 久

大館市教職員研究実践発表会が、今年度29回目を迎えました。毎年、各方面から多岐にわたる実践が発表され、どれを拝聴すればよいかと迷わされていました。今年度は、これまでよりももっと多方面からの発表があり、高橋教育長がよく口にされる『大館盆地を学舎に、大館市民を先生』ということが確かに実現されてきていることを実感させられます。学校関係者だけでなく教育施設や市役所、地域振興局など行政に関わる方々からの発表もあり、他に類を見ない会だととても誇らしく感じているのは私だけでないと思います。

一方、本職であるわれわれ教員の発表数がここ数年少なくなってきたのではないかと危惧しているのは、余計な思い込みでしょうか？ 今回の発表題からは、『今注目されている教育への先駆的实践』『他に類を見ない教育実践』『他校がやっていないような取組』『…………』と、まさにすばらしい内容を感じます。実践発表会としては何の違和感も感じはしませんが、何かしらすごいことをやっていないければ発表はできないのかなあと感じてしまわないかと感じるのです。

わたしがまだ若かったころは、『こんなことに取り組んでみました。ご意見ください。』『こういう思いで実践しています。何かアドバイスください。』『こんな子どもにはどう接すればよいでしょうか。悩みを共有しましょう。』的な発表がたくさんあったように記憶しています。もちろん、当時もすごい実践をされている先生方の発表もたくさんありました。学校の壁を取っ払って何でも話し合えたことが、間違いなく自分を成長させてくれたし、年齢層を超えたいろいろな先生方を知る機会ともなりました。

『そんなことを言うのであれば、どんな形の発表をすればよいのかおまえが実際に示したらどうだ。』と思う方もいるかもしれませんね。来年の1月、私なりの研究が発表の機会をいただけるようであれば、喜んで臨ませていただくということを明言しておきましょう。

大館市の教育は、今とても充実していると感じています。子どもたちの学ぶ姿や生き方が何よりすばらしい。そして、校長会、教頭会をはじめ、教務主任会、研究主任会等の各委員会や協議会が、ふるさとを担う未来大館市民の育成をとそれぞれが同じベクトルで一点を目指して誇り高く実践しているからです。11月に予定されている秋田県学力向上フォーラムは大館の教育の底力を示せる絶好の機会です。全25小中学校が更なる高みに向かって、切磋琢磨していこうではありませんか。

第29回 大館市教職員研究実践発表会要項

- 1 目的 日常の教育実践・研究の発表を通して、子どもたちの可能性を伸ばすよりよい指導方法の追究と教職員の資質の向上を図る。
- 2 主催 大館市教育委員会
- 3 主管 大館市教育研究所
- 4 期日 平成30年1月11日（木）
- 5 場所 大館市立中央公民館・大館市民文化会館
- 6 内容 ・教科指導・総合的な学習の時間・情報教育・特別支援教育・就学前教育・海外研修などの教育諸活動全般について
 ・おおだて型学力を育成する授業の取組等について
 ・日常、学級や学年、または校務担当者として実践研究していることについて
 ・ふるさとキャリア教育の理解推進、または実践事例について
- 7 対象 ・小学校・中学校の全教職員及び幼稚園・保育所、高等学校、大学等教育関係者
 ほか
- 8 日程 12：50～13：30 発表会Ⅰ（40分）
 13：45～14：25 発表会Ⅱ（40分）
 14：50～16：20 全体会
- *発表会 1発表題につき20分以内の発表、質疑の時間は15分から20分程度
 *全体会前の休憩時間には、文化会館大ホールにてH29年冬の子どもサミット代表者会議の様子を上映します。
- 9 全体会 提言 「未来に向けて進化を続ける大館の教育」 大館市教育委員会
- 10 実行委員 実行委員長 茂内 公貴（西館小）

No	所属校	氏名	No	所属校	氏名
1	桂城小学校	成田 美保	14	西館小学校	茂内 公貴
2	城南小学校	金澤 幹子	15	東館小学校	伊藤 薫
3	城西小学校	川崎 郁子	16	早口小学校	津谷 美穂子
4	有浦小学校	佐藤 康子	17	山瀬小学校	藤田 千登勢
5	釈迦内小学校	武石 郁子	18	第一中学校	富樫 敦
6	長木小学校	塚本 じゅん	19	北陽中学校	中嶋 舞衣子
7	川口小学校	奥山 法子	20	下川沿中学校	佐藤 朋子
8	上川沿小学校	高橋 理恵子	21	南中学校	田村 環
9	成章小学校	佐藤 衛	22	成章中学校	米澤 佳祐
10	花岡小学校	松沢 朗子	23	東中学校	阿部 剛士
11	矢立小学校	長谷部 雅子	24	比内中学校	根本 大輔
12	南小学校	松岡 晴子	25	田代中学校	阿部 博之
13	扇田小学校	近藤 織子			

第29回「大館市教職員研究実践発表会」 発表者・発表一覧

時間帯	No	発表者	所属	発表題
I 12:50 ～ 13:30	1	高橋 敦子 鎌田 晴美	大館市立保育園 研究推進委員会	保育所間で連携した保育改善の取組 ～公立保育園の果たすべき役割～
	2	河田 美咲 大越 幸枝 佐々木 幹子	市教育研究会 栄養部会	大館はワンだふる！ ～ 市内統一献立「大館ワンだふる給食」の取組について ～
	3	鳥谷 幸代	釈迦内小学校	1年生の授業づくり 守・破・離の「守」 ～ 話す力・聞く力を育てるために ～
	4	川田 真一 渡邊 倫考	有浦小学校	コミュニケーション能力を高める 外国語活動の実践
	5	櫻庭 晴美	花岡小学校	特別支援学級でのチャレンジ授業～一人学級でのチャレンジ～
	6	小笠原 茂人	東中学校	経験と勘だけに頼らない生徒指導 ～アセスを活用した生徒理解・生徒支援～
	7	小林 寿	大館少年自然の家	PA(プロジェクト アドベンチャー)を活用した道徳教育のススメ
	8	渡部 進雄 藤嶋 孝子	秋田県北秋田 地域振興局	小・中学生向け企業博覧会 ～地域の宝 ふるさと企業から子どもたちへ～
	9	千葉 弘一	秋田職業能力開発 短期大学校	小・中・高校生向けのキャリア教育について ～ 秋田職業能力開発短期大学校の実践より ～
II 13:45 ～ 14:25	10	小林 純子 阿部 美紀子	西館保育園	「食べる喜びを感じ、生きる大切さを知る」 ～「おいしいね」食べるの大好き 心も体もぐんぐん育つよ 西館っ子～
	11	高橋 しのぶ	有浦小学校	子どもたちが主役！「共鳴し、磨り合い、高め合う子ども」を育むために
	12	杉田 佳介	城南小学校	新学習指導要領を踏まえた小学校家庭科「食」の授業実践
	13	三澤 正敏	山瀬小学校	ネマガリダケの皮を使った和紙作りを中心に据えた ふるさとキャリア教育の展開
	14	阿部 英幸	西館小学校	集団の力を高めるPA活用法
	15	千葉 彦希	成章中学校	「安心・安全は地域ぐるみで！」 ～地域連携安全・安心推進事業～ 成章地区でわたしたちができること
	16	小坂 亜紀子	東中学校	考え、議論する中で考えを深める生徒を育てる道徳の実践
	17	乳井 京介(機械科) 近藤 哲也(電気科) 鷹嘴 浩輝(土木建築科)	大館桂桜高等学校	「大館桂桜高等学校 工業科の取組」 ～ 生徒の多様な進路の実現に向けて ～
18	菅原 純	産業部 商工課	若者の地元定着推進と地元企業情報の早期提供 ～ いつでも職場体験！ 企業紹介ムービー ～	



「保育所間で連携した保育改善の取組」

～公立保育園の果たすべき役割～

大館市立保育園研究推進委員会

城南保育園 主任 高橋 敦子

城南保育園分園 主任 鎌田 晴美

1 動機

大館市は人間的基礎力の獲得を目指し福祉と教育が連携して、将来を担う人材育成を目的としたふるさとキャリア教育に取り組み、子どもの教育・保育に力点を置いている。しかし、大館市には多様な就学前施設があり、施設によって教育・保育にばらつきがある。さらに保育に携わる職員が、正規保育士、非常勤保育士、看護師、資格・経験のない保育補助など様々な職種のため、保育に関して共通理解・意識の統一など難しい現状も抱えている。大館市の未来を担う子ども達が豊かな体験を通して、人間的基礎力を育てていくために、教育・保育に携わる者一人一人が「養護を基盤とし、発達の連続性を見通した教育・保育」を理解し、実践できる保育力をつけ、どの施設であっても質の高い教育・保育の提供ができる均一化を図るために、公立保育園だからこそできる地域の基幹園として担える専門性を追求していく。

2 目的

- (1) 公立保育園の主任が就学前施設（30施設）を参観し、大館市内の教育・保育の状況を知り、各就学前施設における課題などを把握する。
- (2) 大館市の保育の現状をふまえ、主任として勤務園の保育改善に取り組む。また主任間でも課題の共有を図り、研修のあり方の検討や各園での保育の向上の取組を通して大館市全体の保育の質の向上を目指す。

3 研究の方法

- (1) 平成28年度一年を通し、秋田県教育庁北教育事務所の大館市内就学前施設要請訪問に同行し保育参観をする。参観した園では午後からの協議にも参加する。参観では大館市の就学前施設の現状・課題を把握することを目的とする。
- (2) 会メンバーの所属する園の研究テーマを共通理解した上で参観し、感想と協議内容を記録し、会メンバーで共有化を図り、市内の就学前施設の課題を明確化する。その後明確化した保育課題を自園に持ち帰り、園内で共有するため研修会を行う。
- (3) 保育の質を保証するために保育現場で使いやすいハンドブックを検討し作成する。できたハンドブックは会メンバーが中心となり保育に携わるすべての人に手渡し、読み合わせをする。
- (4) 保育参観等をふまえて市全体の保育課程を見直し改善する。

4 課題の明確化と取り組み例

(1) 参観から見た課題

- ① 子どもの姿に向き合い、思いを汲み取ったり一緒に遊びを共感したりする姿勢
- ② 子どもの発達についての理解、目の前の子どもの適切な言葉かけ
- ③ 子どものペースを守るための、保育者間の連携や保育方法の工夫
- ④ 保育者が経験させたい遊びと子どもがやりたい遊びの食い違い
- ⑤ 活動のバランスを考えた組み立て
- ⑥ 子どもの現状把握からなる環境構成
- ⑦ 人的環境としての保育者の自覚
- ⑧ 「遊びは学び」という保育者の意識

- ⑨ 遊び込む姿や満足する体験の保障
- ⑩ 保育者自身の遊びの経験不足
- ⑪ 子どもの発信に応答的に関わり、受容される経験の積み重ね
- ⑫ 子ども達の間関係構築に寄与する保育士の援助技術

(2) 課題をもとに各園での取組

- ・各園の課題を具体化し、主任としての関わりについて実践した事例をあげ考察した。実践からの成果としては主任自身の保育観の確認につながり、保育者へ保育の話をもより具体的に伝えたり助言したりしやすくなった。課題としては忙しい保育者達に遠慮してしまい、課題を解決するまでの話合いが足りず、積極的な対応が必要である。各園で成果や課題が具体化され、主任としての学びにつながった。

5 「保育のすてっぷ」作成と活用

(1) 冊子「保育のすてっぷ」の作成

- ・保育の質の向上には保育者の質の向上が欠かせない。そこで、日々忙しい保育現場で『保育』を理解してもらうために初歩的な事柄からイラスト等でわかりやすく解説した『見てわかる保育の冊子』を作成した。

(2) 冊子「保育のすてっぷ」の活用

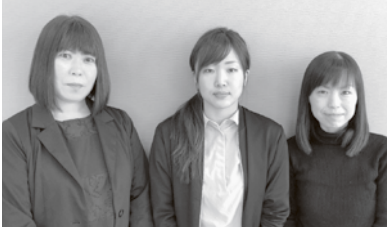
- ・大館市全施設には1冊ずつ配布した。公立保育園には全職員に配布し、各園で主任を中心に読みあわせをし保育改善に取り組んでいる。このことにより、保育現場では子ども一人一人に寄り添う姿勢や、子どもと一緒に環境をつくっていく姿勢など、良い変化の事例がたくさん見られるようになってきた。今後も保育改善に活用していきたい。

6 大館市の保育課程の見直し

- ・市内の就学前施設を参観し、見えてきた課題、自園が抱えている課題をさらに精査し、保育所保育指針の改定を見据えて大館市が目指す子どもの姿を明確にし、平成30年度からの活用を目指している。

7 まとめ

大館市の保育の質の向上を目指し、これまで参観することがなかった公立園以外の園を参観し、一緒に教育・保育を考える機会を持てたことはとても有意義な経験だった。参観で感じたことは当日の研究協議でも伝えることができたが、この研究で見えてきた課題や取組については、就学前職員に向け2回発表し、教職員実践発表で市内の小・中学校の教員にも発信した。また、冊子「保育のすてっぷ」は市主催の研修会で周知してから、市内の全就学前施設に配布した。公立園は主任を中心に園内の課題と思われる部分から繰り返し読み、園内での共通理解、保育の改善につなげる取組を始めたところである。これまでも公立の主任が集まって、月一回の主任会議を開いていたが、園の運営的な部分の会議が中心だった。今回他の園を参観することで、保育についての話合いが深められ共有化ができた。また、園内の悩みや改善の手立てなど様々な意見や案を出し合う機会となり、単園の主任だけでは解決できなかったことに対して、より具体的な対策がとれるようになった。このことにより主任としての意識が高まり、公立園内での連携がしっかりととれ、関わりがさらに深まってきていると感じている。今後は公立私立問わず、各園の特徴を大事にしながらも、教育・保育の基本的な質が保たれ、さらなる向上が図られるよう、大館市の目指す方向性をさらに明確にし、公立園が率先して保育の公開と「同じ目線で」一緒に協議する機会をつくりながら、地域の基幹園としての専門性を図っていきたい。



大館はワンだふる！

～市内統一献立「大館ワンだふる給食」の取組について～

市教育研究会栄養部会 学校栄養士 河田 美 咲
学校栄養士 大越 幸 枝
学校栄養士 佐々木 幹 子

1 はじめに

今年度初めての試みとなった「大館ワンだふる給食」。これは、大館産・秋田県産の食材を中心とする「ごはんとパンの献立」を考案し、市内すべての小中学校において統一した献立を提供するものである。今年度の大館市栄養部会が実施した取組の一つである。

2 テーマ設定の理由

地場産物を給食の食材に活用することは、子どもたちの健康はもちろんのこと、郷土愛を育み、さらには地域の活性化にもつながる。ふるさと大館を好きになる、そんな心温まる学校給食を提供することはできないのか、この発想が本実践のスタートであった。

背景には、学校給食法、また学習指導要領にうたわれる地場産物活用の奨励がある。子どもたちに郷土料理のすばらしさを体得させること、そして郷土の味、地場産物を尊重する心を育てることが記載されるようになったことも、本取組実施のきっかけとなった。

3 研究の内容

(1) 第1回研修会（地場産物に関わる研修）

- ・期 日 平成29年7月28日
- ・会 場 枝豆畑（本田順子さん）
（株）バイティックファーム大館工場
大館市立中央公民館（調理室及び音楽室）
- ・日 程
 - ① 枝豆畑またはレタス工場の見学
 - ② 調理実習および試食会
「枝豆」「比内地鶏」を使用した献立
 - ③ 献立内容の検討
 - ④ 実施日程の調整、キャッチコピーの検討
 - ⑤ 各校・各家庭配付用資料の作成



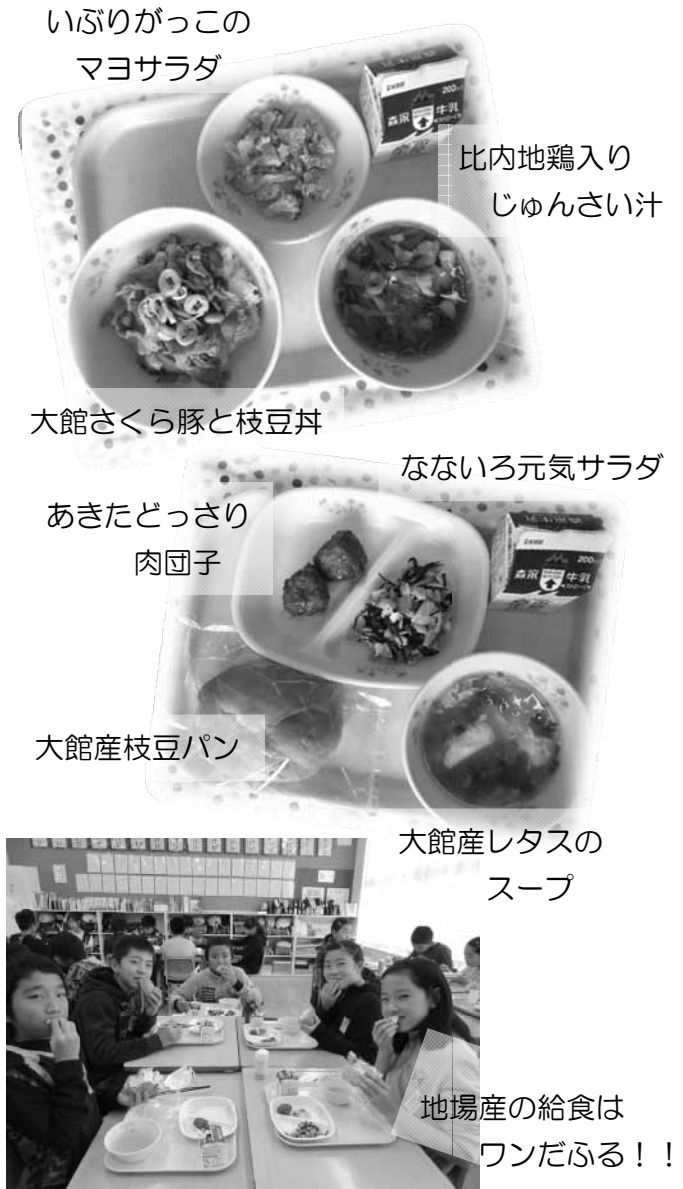
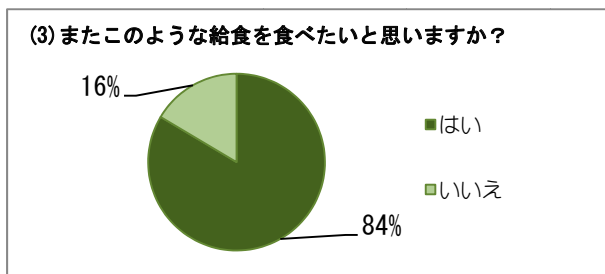
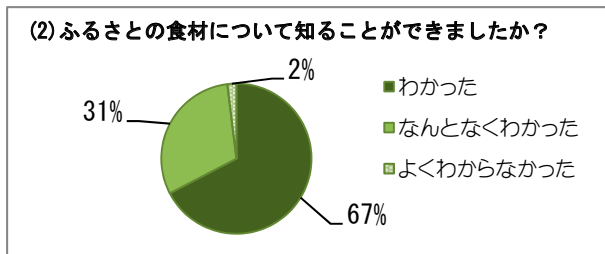
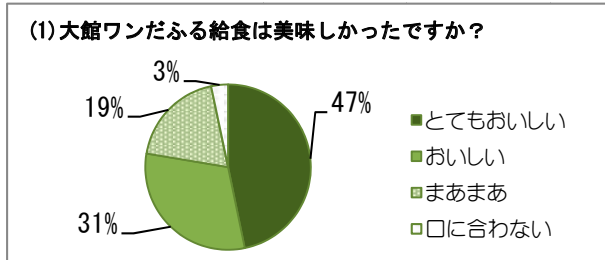
ワンだふる給食実施の流れ

- ① 家庭におたよりを配布（10月10日～10月13日）
- ② 各校・各センターの予定に合わせて給食提供（10月16日～10月27日）
- ③ 事後アンケートの実施
小学校6年生と中学校2年生を対象に実施し、各校・センターで栄養士が集計

(2) 第2回研修会

- ・期 日 平成29年11月10日
- ・会 場 大館市役所比内総合支所
- ・内 容 活動の振り返り・研究協議

【アンケートの集計結果】



4 成果と課題

- 様々な調理法や地元の食材のおいしさを知った子どもたちが多く、「またやってほしい！」という声が多かった。
- 地場産物を使った給食から、故郷のすばらしさに気付く感想がたくさん見られた。「もっと地元食材のことが知りたい」という感想もあった。(ふるさとキャリア教育の視点)
- いつもは苦手な食べられない食材も、食べることができたという子どもが多かった。
- 学級活動、家庭科、社会科、ふるさと教育など様々な教科、領域と関連させた取組をしてくださった学校もあった。
- 保護者向けのおたよりやアンケートを作成し配布したことで、取組についての情報を発信することができた。取組の成果が地域や家庭にまで広がるよう、内容を深めたい。
- 栄養教諭や学校栄養職員の所属校と受配校で指導の差が生じたので改善が必要である。
- 市内全ての児童生徒分の食材の確保、また予算の見通しは早めの段階で行う必要がある。
- 献立をそのまま利用できない給食センターでは、献立をアレンジしながら給食づくりを行っていた。安全な給食を優先したが、アレルギー対応でもおいしいものを提供できるような配慮をしていきたい。



1年生の授業づくり守・破・離の「守」

～話す力・聞く力を育てるために～

大館市立釈迦内小学校 教諭 鳥谷幸代

1 昨年度の課題から、今年度、授業づくりで心がけたこと

- ・いつでもどこでも、基本的な学習習慣を身に付けた学びができることを目指す。
くどんな活動をしていても、基本は授業での姿と考える>
- ・子どもの学び方や考え方のよさを見逃さず、認め、励ましていく学びの雰囲気を作る。
く「教室はまちがうところ」だからこそ、子どもを信じて生かす>
く幼保での遊びの体験があるから、「ゼロからのスタートではない」と捉える>

2 話す力・聞く力を育てるために、授業で大事にしたこと

(1) 助け合って話し合うスタイルをつくる

1学期には、挙手しても言葉にすることが難しい子どもたちの意欲を損なわないために、「忘れました。」という姿に対して、周りが元気に声を出して「どんま〜い。」と反応することを繰り返した。2学期になり、このままの話合いでは自分たちで課題を解決することまでは至らないと、授業のゴールを意識し始めるようになった。考えを話したり聞いたりする中で、相手の発言につなげるためのよい表現が児童から出されたときに、その表現を取り上げて掲示するなどして繰り返し使用し、共有できるようにした。

【例】児童1：「(はりきって挙手し、指名されて返事をして立った後) ……忘れました。」

周りの児童：「どんま〜い。(沈黙したままにならないように、明るく励ます。)」

児童2：「わたしが続けます。わたしはこう考えました。(挙手した児童が、考えを途中まで話す、止まってしまう。)

……………言い方が分からなくなったので、誰か、つなげてください。」

児童3：「〇〇さんを助けます。」(考えを聞いていた児童が、挙手する。)

児童2：「△△さん、お願いします。」(発言が止まった児童が、相手を指名する。)

児童3：「〇〇さんが言いたかったのは、こういうことだと思います。」

……(考えを説明する) ……〇〇さん、どうですか。」

「みなさんは、どうですか。」

(2) 「ことばのハンドサイン」を活用する

自分に指名して欲しいために、教師に向けて「はい、はい、はい。」と大きな声を上げて挙手する姿は、1年生の授業にありがちである。ハンドサインは、話したい児童の意思表示と教師が指名するためには役立つけれども、サインを出しただけでは全体には伝わりにくい。そこで、挙手するときハンドサインを示しながら、どんな発言をしたいのかを声に出して周りに伝えることにした。

【例】付け足し：「〇〇さんに付け足します。」

「〇〇さんの意見に似ているんだけど、ちょっと付け足しです。」など
違う意見：「違う意見があります。」

「ぼくから話します。」 「わたしの話を聞いてください。」 など
同じ意見：「違う言い方があります。」 「ちょっと違う言い方で言います。」

「〇〇さんと同じなんだけど、言い方を変えます。」 など
発言した友達が、言葉に詰まってしまったとき

「今度は、がんばろうね。」 「今度は言ってみようね。」

「〇〇さん、分からないから助けてくださいって言えばいいんだよ。」

「誰かが助けるから、大丈夫だよ。」 などと、周りから声をかける

(3) ペアで話す、助け合って考える

全体での話し合いの前にペアで考えたり、ペアで考えを交流したりすることは、1年生にとって大切な学びのスキルだと考えている。隣の席の友達と話すことが多いが、前後の席で話したり、話したい相手の席へ移動して話したりすることも取り入れている。ペアでの交流の後は、必ず2人で挙手し、2人とも立って話すことにしている。



【例】児童1：「〇〇さんと話したら、～だと分かりました。」

教師：「(話さなかったもう一人に向けて) △△さん、付け足しはありますか。」

「〇〇さんと話したら～」と話し始めることが、相手意識を育てるために大事だと考えている。ペアで話すときには、必ず相手に体を向けることも大事にしている。ペアで全体へ向けて考えを説明するとき、もう一人は話している友達の横で立っているだけでなく、ノートを持って見せたり、教科書の文章を示したりする役割を担っていることもある。



(4) 学習リーダーを活用する

日直が学習リーダーになり、タイマー係を兼任して、輪番制で全員が経験できるようにした。課題やめあてを確認することと、まとめを確認することを、次のように行った。

学習リーダー：(教師が課題やめあてを書き始め、児童もノートに書き始めて2分後に)

「課題(めあて)を読みましょう。さんはい。」

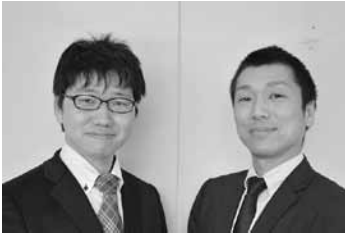
全員で：(元気に声を出して、課題(めあて)を読む。)

学習リーダー：「がんばりましょう。」

3 「みんなで創る学び」のために

どんな授業や活動でも、授業者が替わっても、いつでも同じようにできる子どもたちに育てる。それが授業では大事だと考えている。釈迦内スタイルで行っている「学習リーダー」の活用が、上の学年での学び方につながるように、低学年としてのスタイルを確立することを今後の課題としたい。





コミュニケーション能力を高める外国語活動の実践

大館市立有浦小学校 教諭 川田 真一

教諭 渡邊 倫考

1 はじめに

今年度、本校は拠点校・協力校英語授業改善プログラムの指定を受け、外国語活動の授業改善に取り組んできた。その取組について紹介する。



2 4月からの外国語活動の取組

(1) 児童の英語による言語活動時間の増加のために

① やり取りの場を増やす

- ・相手が答えやすいような質問をする。
- ・表現の定着を図るため、様々な形態で繰り返し話すようにする。

② 基礎・基本となる単語や文の定着

- ・反復練習をするためにチャンツなどを活用する。
- ・授業で新出表現を繰り返し取り上げる。
- ・朝の会や他教科などでも話したり、歌ったりする場を設ける。
- ・絵や言葉を提示するなどして、目からのインプットを意識できるようにする。

(2) 外国語活動担当教員の英語発話量の増加のために

① 目標は「オールイングリッシュ」

- ・ほめ言葉をたくさん言う。
- ・児童にとって分かりやすい表現を使う。
- ・クラスルームイングリッシュの習得と活用を図る。
- ・絵本の読み聞かせを通してインタラクション（児童とのやりとり）をする。



3 9月の公開研究会「Turn right」(6年3組 川田真一・若松メラニー)

(1) ポイント「発話量の増加」「オールイングリッシュ」

① 児童の英語による言語活動時間の増加のために

- ・学習リーダーの活用…日直があいさつをしたり、日付や天気を聞いたりする。
- ・授業導入時の児童によるデモンストレーション…活動の見通しをもたせる。
- ・ペアやグループでの活動…児童同士がやり取りする時間を確保する。

② HRTの英語発話量の増加のために

- ・ALTとの打ち合わせ…分かりやすい表現についてのアドバイスを受ける。
- ・説明や指示は短く簡潔に…できるだけ聞いたことがある表現を使用する。

③ HRTの英語力及び指導力の向上

- ・単元構想では、既習表現を使う必要感のあるアクティビティを考える。

4 11月の公開研究会「What's this?」（5年2組 渡邊倫考・佐々木圭子）

(1) ポイント「オーセンティック」「既習内容」

① 児童の英語による言語活動時間の増加のために

- ・コミュニケーションの自由度を高める…その単元で出てきた表現のみでのやり取りだけでなく、既習表現を選択して使えるような場面を設定する。
- ・コミュニケーションストラテジーの獲得…習ったことのない表現を使わなければならないための、「How do you say ~ in English」を教え、言語の獲得を図った。

② HRTの英語発話量の増加のために

- ・オールイングリッシュでの授業…「クラスルームイングリッシュのフル活用」「ジェスチャーを使う」「できるだけ児童にとって身近な英語を使う」ことを意識した。

③ HRTの英語力及び指導力の向上

- ・単元構成では、既習表現を活用してコミュニケーションをする工夫を取り入れた。また、「Small Talk」を導入し、課題の把握や新出語句との出会いの場とした。
- ・児童にとって身近な場面を設定するために、地域素材「きりたんぽまつり」「秋田・大館の名物」を活用した。

5 まとめ

(1) 4月からこれまでの児童の姿

① 成果

- ・ALTと授業中に質問したり、会話したりしようとする場面が増えてきている。
- ・既習内容や知識を活用して、やり取りしようとする態度が身に付いてきた。

② 課題

- ・音だけでは定着しない児童がいるため、個人差に対応する方策を考える必要がある。
- ・慣れ親しむ段階に留まらず、既習内容を十分に活用できる学習を展開する。

(2) 4月からこれまでの教師の姿

① 成果

- ・オールイングリッシュを意識して授業を進めるようになった。
- ・地域素材や身近な物や話題、必要感のある場面を取り上げるようになった。
- ・単元を構築する際には、児童が自ら表現を選択し、考えて話すことができるような授業づくりを目指すようになった。

② 課題

- ・現実に近い場面のある授業、単元の構築を図る。
- ・外国語活動の時間に学習したことを確実に定着させる方策を探る。
- ・各発達段階での英語授業の姿や習得させる内容を明確にし、職員全体で共通理解していく必要がある。

(3) 今後の目指すべき授業

- ・「オールイングリッシュ」を基本とした授業を行う（個への配慮は必要）。
- ・オーセンティック（必要感・リアルな会話）と既習事項の活用を取り入れる。
- ・どのようなコミュニケーション能力を伸ばしたいのかを明確にする。
- ・朝の会や他教科でも、英語を使う場面を増やす。



特別支援学級のチャレンジ授業

～一人学級でのチャレンジ～

大館市立花岡小学校 教諭 櫻庭晴美

1 はじめに

本校では、キャリア教育で「課題対応能力」を身に付けさせるため、チャレンジ活動に取り組んできている。授業が土台になるとして「ベーシック（基礎・基本）授業」「チャレンジ授業」の研究・実践にも取り組んできている。「特別支援学級でも『ベーシック（基礎・基本）授業』『チャレンジ授業』に取り組んで、アグレッシブにいきましょう!」ということから今回の取組が始まった。学級は知的障害学級で、小学3年生の男児1名が在籍している。いわゆる「一人学級」である。

2 チャレンジ授業への道筋

(1) まず、「ベーシック（基礎・基本）授業」から

- ① 「基礎・基本」は、特別支援学級でも大事であることから、まず、「ベーシック授業」に取り組んだ。
- ② 知的障害学級（以下「あおぞら学級」）で取り組んだこと
 - ア スモールステップ（変化のある繰り返しを行う。易しい問題から難しい問題へ）
 - イ 課題の工夫（短時間で提示。興味を引く、具体的な場面を課題に取り上げる等）
 - ウ プリント天国（←児童命名。基本の練習問題にたくさん取り組む。）
 - エ ミニホワイトボードの活用（自分の考えを少しでも書いて発表に役立てる。）
 - オ ミニミーティング（1時間での学びを、表情カード等も使って振り返る。）

(2) いよいよ「チャレンジ授業」にチャレンジ

- ① あおぞら学級の児童の実態から考えて
 - やった方がいい。特別支援学級の児童だからこそ、主体性がなくてはいけない。
 - いろいろなハンディキャップがあるからこそ、必要。
- ② 通常学級の取組を基に、あおぞら学級でも取り組もうとした。
 - ア 導入～課題解決への意欲付け
 - ・ 選択肢を含む問題（例）理科：かげはどう動くのかな？ A太陽と同じ B太陽と反対
 - ・ 間違った問題の提示「本当ですか？」（例）算数： $14 \div 3$ は5です。本当ですか？
 - ・ 他の求め方を考えさせる問いかけ「他にはいくつありますか？」（例）算数： 12×4 の答えの求め方は、 $12 + 12 + 12 + 12$ の他に、いくつありますか？
 - イ 展開～試行し、考えを表現
 - ・ 展開のところは、児童同士の交流による解決方法の発見の場。
 - ・ これまでの「教師と児童1名の会話」や「やり取り」では、課題解決にあたって教師主導になってしまい、「やらされている。」という思いから抜け出せない感がある。あおぞら学級なりに、児童の主体性をできるだけ発揮できる場にした

い。そのために、児童の得意技を生かしていこうと考えた。

《児童の得意技》

- ・書き込んで理解するタイプ
- ・発表すること、人前に出ることが好き
- ・ビデオや音声を視聴することが好き
- ・自分で撮影することが好き
- ・演じることも好き

→得意技を生かした、あおぞら学級の取組

《方法1》もう1学級ある特別支援学級（自閉症・情緒障害学級）との交流

- ・生活単元学習などの話合いの時間で、2人の学級担任のうちの1人が子ども役となり、見本を示したり新たな提案をしたりして、話合いを活性化。
- ・交流することで、児童（そして子ども役の教師）と、発表し聞き合う活動が可能になった。
- ・ふだんは一人学級だからいつもできるわけではない。

《方法2》子どもと先生の役割交代

- ・「バトンタッチ」「チェンジ」という合言葉で役割を交代し、子どもが先生、教師は子どもとなって展開していく。
- ・子どもが、相手（子ども役の教師）の意見を引き出す・相手の考えを反復して説明・大事なことを板書（メモ・チョークで囲む等）する等して、子ども役の教師に教える。
- ・継続して取り組むことで、学習への集中力がさらに高まり、子ども役の教師と一緒に課題を解決しようという思いや行動につながってきた。
- ・子ども自身が得意技を生かした活動に主体的に取組、取組内容も充実してきている。

3 児童の声

- ・明日チャレンジ授業があることを予告すると「チャレンジ授業だと、A先生登場ですね。」と、授業への見通しをもち、自分の活動を楽しみにしている。
- ・チャレンジ授業の終わりにミニミーティング（振り返り）をすると「また、先生に変身したいです。」という発言があった。

4 まとめ

- ・役割交代を子ども自身が楽しみながら、チャレンジ授業に意欲的に取り組んでいる。一人学級であっても、会話や、やり取りを重ねることができ、子どもを鍛えることに結び付いているのではないだろうか。ベーシック授業を土台にしつつ、チャレンジ授業で課題対応能力を身に付けていくことや児童同士の交流による課題解決ということについて、あおぞら学級なりの方法になったと考える。

→特別支援学級でも、一人学級でも、子どもの個性を生かすことで、楽しく「ベーシック（基礎・基本）授業」と「チャレンジ授業」に取り組むことができたと思う。特別支援学級であっても、「チャレンジ授業」にこれからもチャレンジしていきたい。



経験と勘だけに頼らない生徒指導

～アセスを活用した生徒理解・生徒支援～

大館市立東中学校 校長 小笠原 茂 人

1 はじめに

最近、多くの学校では、子どもの実態を知るために、いじめ・悩み調査や生活・学習アンケートなどを行っている。そのアンケートからは、生徒の様子や表面的な課題は見えるが、内面や心の内までは見えない。指導に関しても、教師の経験や勘をもとに、手探り状態でやっているのが実情である。しかし、アセスを活用して、子ども理解を深め、SOSのサインを見抜くことができれば、経験と勘だけに頼らない、効果的な支援ができるはずである。

2 「アセス」とは

アセスは「学校環境適応感尺度」と訳され、大きく「生活満足感」、「対人的適応」（教師サポート、友人サポート、向社会的スキル、非侵害的關係）、「学習的適応」の3つの側面と6つの観点から、学校適応感を捉えている。「適応感」とは、生徒自身が周囲の環境や人をどう感じているか（置かれている環境に満足しているか否か）を表す言葉である。

例えば、ポツンと一人でいることが多い生徒を、私たち教師はどのような見方をするだろうか。アセスの結果からは、A or B どちらの状態であるのかが分かるのである。問題になるのは、Aの生徒である。適応感が低く、SOSを発信している状態なので、私たちは早急に手を差し伸べなければならない。

つまり、子どもが今置かれている状態をどのように感じているかを調べ、内面や心の内を探るのにアセスは有効である。

次の生徒をどう見る？

○最近、1人でポツンといることが多い。
仲間はすれでは!?

A みんなと一緒にいたいが無視されている
困っている、先生助けて！(SOSを発信)

B 人と関わるのが苦手、一人でいるのが好き
今のままで満足(そっとしておいて！)

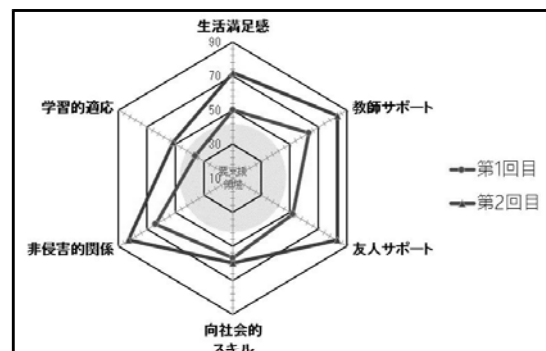
3 アセスの分析データからわかること

- (1) 学校生活での適応感（SOSのサイン出している生徒を見付けることができる。）
- (2) 学校以外の場での適応感（家庭のことを聞かずに、学校以外の場での適応感が分かる。）
- (3) 学級担任の関わりの受け止め方（担任の関わりをどう思っているか。）

4 アセスで得られるデータの種類

(1) 個人特性表の例（レーダーチャートについて）

右のグラフは、個人特性表の一部である。バランス良く外側に広がっているほど適応感が高いことを示している。2回目は青線で示され、線が全体的に外に広がったことで、適応感が高くなったと言える。



(2) その他のデータ

生徒が34項目のアンケートに回答し、その結果（1～5の数値）を入力と、「個人特性表」（左下図）「学級平均表」「学級内分布表」「学級間分布表」のデータが得られる。個人や学級のデータを関連させながら分析・検討することで、より適切な支援が可能になる。

5 効果的に活用するための工夫

個々の生徒の適応感が一目で分かるように、学級名簿に▲や△の印をつけた一覧表を作成した。1学年分をA4用紙1枚に表すことで、学年全体の傾向と様子が分かり、1学期と2学期の調査データを並べることで、生徒の変容が分かるように工夫した。

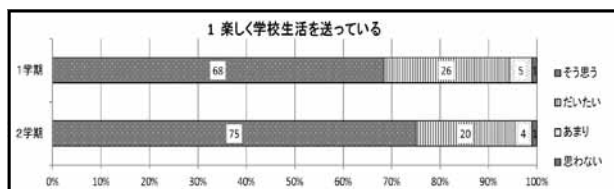
1年A組		1学期					2学期						
		生活満足感	教師サポート	友人サポート	向社会的スキル	非侵害的関係	学習的適応	生活満足感	教師サポート	友人サポート	向社会的スキル	非侵害的関係	学習的適応
1	青森花子		△										△
2	秋田一郎												
3	岩手秋夫		△		△								
4	仙台春子						△						
5	福島県男	▲		△	△				△	△	△		

6 生活アンケートから見た生徒の変容と教師の声

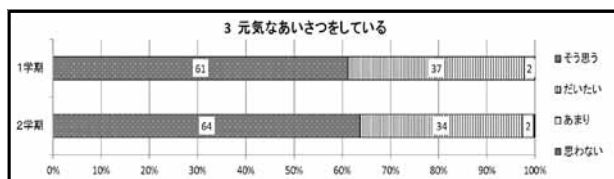
本校では、いじめ・悩み調査は年3回、授業アンケートと学校生活アンケートは年2回、7月と12月に行っている。下のグラフは、適応感に関連する生活アンケートの結果を表しているが、望ましい変容を遂げているのが分かる。また、右下にはアセスに関する教師の声を載せているが、生徒理解や生徒支援に役立っているという感想や意見がほとんどである。

生徒生活アンケート(1・2学期の比較)

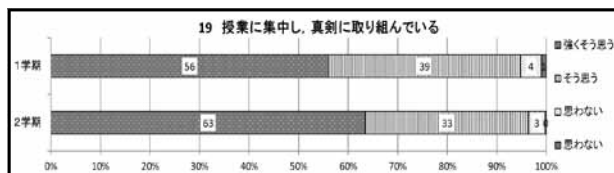
学校生活が楽しい（生活満足感3.62→3.69）



元気なあいさつをしている（向社会的スキル3.59→3.61）



授業に集中している（学習的適応3.50→3.60）



教師の声(アセスに関する)

- なるほどと感じる生徒が多かったが、ふだんの様子からは見当もつかない生徒もいた。数値が低い生徒には、あらゆる機会をとらえて積極的に関わっていききたい。
- 生徒の困り感、感じていることが目に見えた。教育相談や日常の会話を増やして、対応していきたい。
- 自分ではその生徒に目をかけているつもりだったが、「教師サポート」の数値が低く、少しショックだった。自分の思いが空回りせず、生徒にしっかり届く支援を考えたい。
- 「生活満足感」が低い生徒に関しては、保護者との面談で家庭の様子を伺うことができ、有意義な情報交換となった。今後の指導に役立てることができた。
- 日頃生徒に感じていることや課題をアセスの結果と照らし合わせることで、より正確に生徒の内面を把握することができると思った。
- 学習への不安の大きさがわかったので、個に応じた支援を確実に行うことで、少しずつ不安を取り除いて、学習への意欲付けを図っていききたいと思う。
- 生徒が保健室に来たときは、アセスの結果を頭に置きながら、生徒と会話し関わっていききたい。

7 終わりに

アセスによって、子どもの内面や本音を知り、発信しているSOSや困っていることに気付くことができるようになった。アセスのデータに日常の観察（目配り・気配り・心配り）や教師としての経験や勘を加えることで、その子どもに合った具体的な関わり・支援ができるはずである。アセスを生徒理解の一つの手立てとして、有効に活用していきたい。



PA（プロジェクトアドベンチャー）を活用した 道徳教育のススメ

わんパーク大館少年自然の家 所長 小林 寿

1 はじめに

わんパーク大館少年自然の家で体験できる活動プログラムにPA（プロジェクトアドベンチャー）がある。PAはドキドキワクワクする冒険を活動の柱にして、協調性や信頼関係などを構築する米国発祥の教育プログラムである。秋田県では県内三つの少年自然の家に専用の設備を設置し、活動を提供している。今年度、多くの教育的価値を含むPAの道徳教育における活用法について、協力校を通して実践を試みた。その内容を紹介したい。

2 PAがもつ教育的価値

PAは、体験（チャレンジ）する→振り返る→気付く→新たなチャレンジに適用する、というサイクルを繰り返しながら集団で冒険をクリアしていく活動である。なぜうまくいかなかったのか振り返り、どう修正すればいいのか皆で知恵を出し合い、力を合わせてチャレンジを繰り返す、このサイクルの中で協調性が生まれ信頼関係が強固なものになっていく。課題をクリアした時の達成感は、個の成長や集団の成長につながっていく。友情、信頼、相互理解、寛容、思いやり、協力、勇気、分析力、判断力、決断力など多くの教育的価値が含まれている。学校教育においては、仲間はずれやいじめの防止、集団生活の向上、豊かな心の育成等につながる活用が可能である。生徒指導的側面、特別活動的側面、道徳教育的側面からのアプローチが可能な活動と言える。



3 PAを道徳の時間に活用してみよう ―協力校での実践から―

(1) 協力校

今年度、わんパークで宿泊体験教室を実施する学校の中から、大館市立長木小学校に協力を依頼したところ快く承諾いただいた。実施学年は第4学年、授業者は担任の菊地悠希先生。8月29・30日、宿泊体験教室の中でPAを実施、その活動を映像や写真で記録し、11月28日、PAの様子を資料にして道徳の時間を実施した。県北初の試みである。

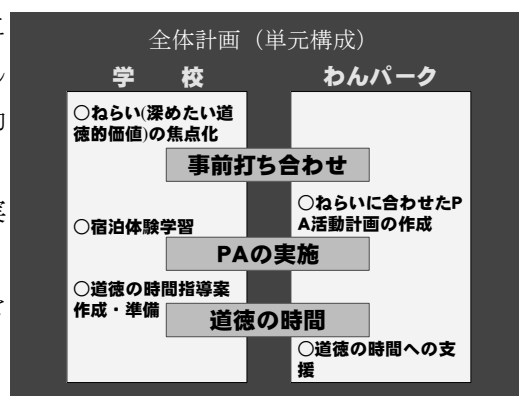
(2) 全体計画

作成するに当たっては、学校とわんパークの綿密な打ち合わせが必要になる。まずはじめに、学級担任は道徳の時間で深めたい道徳的価値を焦点化する。次に打ち合わせで

学級の実態、児童の実態、深めたい道徳的価値についてわんパーク職員に伝え、それを受けてわんパーク職員は数ある活動の中から最も適した活動を選定し、PA活動計画を作成する。

宿泊体験教室では、わんパーク職員がPAを実施し、担任は児童の様子を見取り記録をとる。

後日、担任は学習指導案を作成、資料の準備を行い、道徳の時間を実施する、という流れである。



(3) 道徳の時間の実施

- 主題名「友情・信頼、助け合い2-(3)」
- 資料名「仲間力、何点？」
- ねらい

体験したPAを写真や動画で振り返る活動を通して、協力することのよさに気づき、互いに助け合って生活しようとする態度を養う。

- 授業の様子

導入時「わんパークでどんな活動をしたか」の問いかけに、児童は即座に多くの活動を答えた。3か月経過後もPA体験が強く心に残っている様子が見え、「なぜみんなで立つことができたのだろう」の問いかけでは、深く考え議論する姿が見られ、ねらいとする価値に迫ることができた授業であった。

教師の働きかけ

仲間力10倍にした行事がありましたね。そうですね。わんパークに行ったらどんな活動をしましたか。

今日は、みんなで立つことができたスタンドアップの活動を振り返って見ましょう。
始めはどんな様子でしたか。

活動の終わりにはどうなりましたか。

どうしてみんなで立つことができたのでしょうか。

もう一度ビデオで成功したみんなの姿を見てみましょう。

わんパークのボボさんから、その時の皆さんの様子についてお話をしていただけますよう

今日の授業や、PAを振り返って感じたことを書いてください。

児童の反応

ロープで渡るやつ。手合わせ。台に乗るやつ。フラフープくぐり。ジャイアントシーソー。みんなで手をつないで立つやつ…。

バラバラで立てませんでした。無理だと思っていました。息が合っていなかった。どうすればよいか分からなかった。手のつなぎ方もバラバラでした。

始めはバラバラだったけど、最後にみんなで立つことができた。無理だと思っていたが成功することができた。ぴったり息を合わせることができた。アドバイスあって立つことができた。

協力してやったから。いい所、ダメな所の意見を出し合ったから。みんなで一緒に考え、力を合わせ、声をかけ合ったから。失敗した時は謝った。あきらめなかったから。成功させたいという思いが強かったから。

(拍手わき上がり)
うわあー、やった！できた！

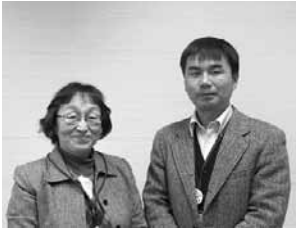
協力するのは難しいと思っていたけれど、みんなで意見を出し合い、その意見をまとめて、声を出し合って協力していたということが分かりました。アドバイスや声をかけ合うことでどんどんいろんな事が成功するのを感じました。

4 効果的に活用するためのポイント

- (1) ねらい（深めたい道徳的価値）を焦点化する→多くの価値が含まれるため、児童生徒や学級の実態、教師の願い等に応じてねらいを絞らしましょう。
- (2) PA活動時、担任は観察・記録に徹する→活動はプロのわんパーク職員に任せ、担任は見取りに専念し、授業や評価に生かすようにしましょう。
- (3) 打ち合わせでわんパーク職員にどんどん注文する→児童生徒の実態や、担任の思いが分かればねらいにぴったりの活動を提供できます。
- (4) 宿泊体験教室がないなら出前でPAを実施する→PAは学校においても実施可能です。要請があれば学校に出向いて行うことができます。

5 おわりに

長木小学校の協力を深く感謝したい。担任の菊地悠希先生からは、「初の試みで不安はあったが、授業を行って、自分たちができたこと、その時抱いた気持ち、共有した思いを深く記憶に刻むことができた」と感想をいただいた。PAを道徳に、あなたもやってみませんか。



小・中学生向け企業博覧会

～地域の宝 ふるさと企業から子どもたちへ～

秋田県北秋田地域振興局 副主幹兼班長 渡部進雄
副主幹 藤嶋孝子

1 はじめに

今年度初めて「小・中学生向け企業博覧会」を実施させていただいた。発表では、秋田県の現状と課題から、なぜ「小・中学生向け企業博覧会」の実施が必要なのか、その趣旨と実施した概要について説明した。今後教育課程の中で「企業博覧会」を最大限に活用していただくことにつなげたいと考えている。

2 秋田県の現状と取組

平成26年5月、「日本創世会議」において、大潟村以外の県内全自治体が、平成52年までに若年女性(20～30代)が半減する「消滅可能性自治体」とされ、平成29年4月、県の人口は、100万人を割った。7割が自然減、3割が社会減であり、18歳～23歳の若者の県外への進学や就職が社会減の主要因となっている。

県では、課題解決に向けて、平成27年度に「あきた未来総合戦略」を策定し、平成29年4月には、人口減少克服に集中的に取り組むため、「あきた未来創造部」を新設した。

3 北秋田地域の現状

管内(北秋田地域)の新規高卒者の進路は、就職者の4割、進学者の7割が県外となっている。また、県内就職者の9割が管内へ就職しているものの、管内に就職しない場合は、県外という傾向がある。地元には、全国に誇る技術力をもった素晴らしい企業・仕事がたくさんあるが、知られていない現状がある。



子ども、保護者、学校関係者へ地元企業の魅力を伝える機会を作ることが必要。

4 小・中学生向け企業博覧会の実施

(1) ねらいと概要

① ねらい

子どもにとっては、地元企業の強みや魅力に触れることで将来の進路選択の幅を広げるとともに、地元で生き生きと働いている大人に触れ、自分もふるさとのために頑張ろうとする気概を育てる。企業においては、自社の魅力や仕事のやりがいを伝えるノウハウ蓄積の場とするとともに将来の人材獲得に向けた情報発信の場とする。キャリア教育との連携においては、興味をもった仕事は、「子どもハローワーク」や「職場体験」を通じて、理解を深められるようにする。

② 概要

10月21日、市産業祭において実施した。児童・生徒、保護者合わせて173名の参加があり、出展企業は15社であった。参加者は15グループに分かれ、4社の指定訪問と1社の自由訪問を行った。1社当たり7分間の説明と3分間の質疑応答の時間を設定。企業側は、自社で実際に使用している機械や製品を展示したり、写真、映像、資料を使ったりしてPRした。

(2) 実施後のアンケート結果

児童・生徒

「将来について考えるよい機会となった」「仕事の技術・素晴らしさが分かった」等

保護者

「思っていたよりとてもいい機会」「子どもの成長のために続けて欲しい」「地元は何もないのではなく地元どんな企業があるのか知らないだけ」等

企業

「地元の産業、企業を知ってもらい興味をもってもらうことが地元で働いてもらう第一歩。弊社も微力ながら協力させていただく」等の声が聞かれた。

(3) 成果

子どものときから、ふるさとを学ぶ機会をたくさん作ることが重要であること、また、大館の良さや大館にある企業のよさを知り自分の将来と結び付けることが大事であること、つまり、「ふるさとキャリア教育」の重要性について再確認できた。



現在、各校で職場体験や多様な仕事を知る授業を実施しているが平成30年度は、北秋田地域のすべての子ども（保護者・学校関係者）により多くの企業を紹介する機会を設定する。

平成30年6月28日(木) 大館市立中央公民館

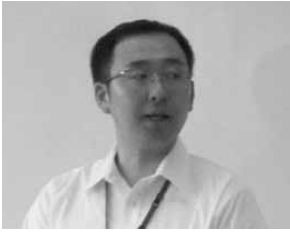
平成30年7月 2日(月) 北秋田市民ふれあいプラザコムコム

中学2年生(学校の判断で他の学年も可)を対象に教育課程の中での実施

5 おわりに

今後は、幼・保・小・中連携だけではなく高等学校との情報交換も大事にしていきたい。「めざす子ども像」だけではなく「めざす大人像」を意識することが大事であると実感した。また、教育現場と、県・市の一般行政が連携する取組をすることの重要性についても改め実感した。地域の宝である「ふるさと企業」から地域の宝である「子どもたちへ」。そして、「すべては未来を担う子どもたちのために」。





小・中・高校生向けのキャリア教育支援について ～秋田職業能力開発短期大学校の実践より～

秋田職業能力開発短期大学校 学務援助課

援助係長 千葉 弘 一

1 はじめに

職業能力開発大学校は厚生労働省所管の「ものづくり実践技術者」を育成する大学校として、2年ごとの専門課程・応用課程があり、当校は東北職業能力開発大学校（東北能開大/宮城県栗原市）の附属短大として専門課程を設置しています。専門課程修了後、より実践的な、生産現場のリーダーを目指す東北能開大の応用課程へ進学が可能です。

当校の特徴として、以下の3点があります。

- ①就職後に即戦力として活躍できることを目標
- ②高い実践技術を身に着けるため少人数制を採用
- ③一人一台の機器を使用し、最新機器なども導入した生産現場に密着した訓練

職業現場に近い訓練環境を整えており、職業訓練施設として職業意識の向上、職業能力形成を訓練に取り入れています。今回はこれらのノウハウを生かし当校で地域教育機関の皆様へ支援協力を行っているキャリア教育の内容について紹介します。

2 キャリア教育の内容

(1) 職業講話（ここがすごい地元企業）

子供達に対してわかり易い内容を、また“憧れ”という観点から職業へ興味を持ってもらうために、子供達が実際に知っているもの・身近なものと企業を繋げて紹介しています。

大館市内の企業が扱っている高い技術やサービスを紹介し、まず「すごい！」と感心するところから始め、同時に地元企業への関心を高める内容としています。

実際講話中に紹介した企業でご父兄が働いている、という子供達もいて、そこから話が広がります。

秋田グルーラム(株)
環境にやさしい
集成材

世界最大級(日本一)の木造ドーム
ニプロハチ公ドームの柱に利用

環境にやさしい再生材 秋田ウッド(株)
(何度でも、くり返し使える)

ペットボトルキャップ
大館市小中学校
177万個で、4.3ton

ドロドロにして
押し出し成型

**羽田空港
第2ターミナル**
5F ほしくずのステージ

左図：ニプロハチ公ドームの木造柱部分…「秋田グルーラム」集成材製造技術

右図：羽田空港ウッドデッキ…「秋田ウッド」再生材（リサイクルには小中学校も協力）

(2) 学校見学（職業現場を意識）

当校の3科では実際に製造現場等で使われている機器を備えているため、一回に多分野の仕事や作業内容を見学することが可能です。

生産技術科



電子情報技術科



住居環境科



機械系の生産技術科では、パソコンを使ったCAD設計から、機械加工・溶接など幅広い加工技術、実験・検査に至るまで、様々な工程を紹介し実際の製造現場を意識してもらいます。

電子・情報系の電子情報技術科では、大きくハードウェア・ソフトウェア・ネットワークの3分野について学び、建築・建設系の住居環境科では、建築分野にも、設計・デザインや測量、装飾、現場監督まで、数多くの職種があることを知ってもらいます。

可能な限り現場や実際のモノを交えて・触れて、興味を持ってもらうように、紹介のみでなく、そこで身につける技術がそれぞれの職業に、どのように関係しているのかを具体的に説明しています。

(3) 適職診断（キャリア・インサイト）

このソフトウェアは、利用者が簡単な質問の受け答えを行うことによって適性評価、職業情報の検索、適性と職業との照合といった一連の流れを行え、パソコン上で回答後すぐに適職リストや職業情報が表示されます。また、その仕事の解説や必要とされる能力なども参照できます。

クラスメイト同士で結果を見比べるなどゲーム感覚で楽しく体験でき、収録職業も多分野に渡り、単に向いている職業の診断に留まらず、知らない仕事や分野に興味をもってもらうことができます。

また、診断結果はあくまで現時点の結果であり、自分の能力や興味はこれからどんどん変わっていくこと、世の中には多くの業種や仕事があることを理解してもらい、様々な進路を選択できるように促すことを目的としています。

1 適性評価 (適性・能力評価)
2 職業情報 (必要知識・資格の照合)
3 適性との照合 (総合評価・判定)

設問の回答状況によって適性や能力を評価、適職分野を導き出します。スポーツ・芸術分野や特殊な職業も収録され、必要とされる能力・資格等が確認できます。

職業適性診断システム「キャリア・インサイト」
開発(独)労働政策研究・研修機構 配布管理:(一社)雇用問題研究会

3 成果と課題

平成28年度は11件・のべ352名、平成29年度も12月までに11件・のべ310名を対象に実施し、アンケート回答でも高い関心・満足をいただいております。また、進路アンケートでは専門学校の比率が多く、これはキャリア教育を受け、自分になりたい職種に直結した技能・知識を得ようとした結果が影響しているものと思われます。

キャリア教育の支援を通じて児童・生徒たちの現状を把握することができるため、今後も地域の状況や時流を踏まえた内容を反映し、より良いものとしていきます。



「食べる喜びを感じ、生きる大切さを知る」

～「おいしいね」食べるの大好き 心も体もぐんぐん育つよ 西館っ子～

大館市立西館保育園

(指定管理者 社会福祉法人大館感恩講) 主任保育士 小林 純子
保育士 阿部 美紀子

1 はじめに

大館市比内町の南西に位置している当保育園は、在籍しているほとんどの子どもが、卒園すると園庭をはさんだ隣の西館小学校に進学している。創立 42 年の（旧）秋田県立比内養護学校、（現）秋田県立比内支援学校が子どもの足で 10 分ほどの北にあり、通年を通して交流が行われている。また、「いこいの森」として市民のウォーキングコースの一つとして親しまれている比内町のシンボル達子森も、散歩コースになっており、緑に囲まれた自然あふれる環境にある。昭和 53 年に建設され、平成 26 年 4 月 1 日から社会福祉法人大館感恩講の指定管理による、公設民営の保育園となり、現在は 70 名が在籍している。

2 設定理由

「食」とは、毎日続いていくものであり、生きていくために大切な営みである。どんなに小さな子どもでも、ままごと遊びの中には「食」が自然と入っている。

西館保育園は、二世帯同居の家庭がほとんどであり、その祖父母は何かしらの農作物を作っているが、野菜の苦手な子どもが多いと感じている。祖父母が田や畑に作物を植えていても、実際子ども達が田んぼや畑に足を運んだり、世話をしたりすることはあるのだろうか。野菜などの自然の作物に出会うチャンスが少ないことも、野菜嫌いの一つの要因ではないかと考えた。

そこで、アンケートを実施したところ、様々な食の実態が明らかになった。食事中落ち着いて座ってられない子どもに悩みを抱えている保護者がいること。また、家庭環境の変化などから、タブレットを見ながらひとりで食事をしている子どもや、朝ご飯を食べずに登園している子どももいたことに少なからずショックを受けた。中でも朝ご飯を食べずに登園している子どもは、登園後ぼんやりして元気がなく、思う存分体を動かして遊ぶことができない様子も見られ、目の前の子ども達の成長に園として危機感を感じた。同時に食事に気持ちが向かないのはどうしてなのか。朝ご飯をきちんと食べるという、望ましい食生活ができないのはどうしてだろうか。という疑問が生まれた。

このようなことから、保育園では家庭の協力も得ながら、様々な「食育活動」に取り組むことにした。

3 研究の仮説

子ども達が野菜を育てたり、家庭で作ってもらったおにぎりを食べたり、クッキングをしたりするなど豊かな食体験の機会を増やすことで、食への関心が高まり、「食べる喜びを感じられる子ども」が育つであろう。

4 仮説に迫る具体的な取り組み

(1) 実態の把握 ①食育についてのアンケートの実施(6月・8月・10月)



- (2) 情報の発信 ①食育便りを発行（おいしんぼ くいしんぼだより）
- (3) 野菜づくり ①プランターや畑での野菜づくり ②祖父母と一緒に苗植え、草取り、芋ほり
- (4) なかよし給食・ピクニックDAY ①おにぎりの日の実施
- (5) クッキング ①焼き芋パーティー、さつま芋

5 研究の視点

- (1) 状況の把握
- (2) 情報提供
- (3) 実践記録からの考察



6 研究のまとめ

(1) 成果

- ① 子ども達が実際に畑に足を運び世話をすることで、野菜の成長を楽しみにする姿が見られた。自分たちの手による野菜の栽培や収穫を通して、以前は口にする事ができなかった子どもも、食べられるようになった食材が増えた。
- ② 食育に関するアンケートを数回行ったことで、食に対する保護者の意識が変わってきたことが分かった。また、園からの食育の情報発信が各家庭での工夫に繋がった。
- ③ 給食の残食が減った。
- ④ 食材を身近に感じるようになったことにより、子どもたちの食への興味・関心が高まり、「美味しくたくさん食べる」ことに繋がった。
- ⑤ 5歳以上児は家庭に協力してもらい、毎週水曜日に「おにぎりの日」を行うことで、母と子の絆が深まり、保護者の意識を変えてもらうことで、子どもたちの豊かな食に繋がった。

(2) 課題

- ① アンケートから若い保護者が食に対する悩みを抱えていることが分かった。情報発信の仕方に工夫が必要。
- ② 3歳未満児はプランターでの栽培を行ったが、収穫する楽しさを十分に味わわせることができなかった。また、同じ種類の食物を数多く育てた方がよかった。

7 おわりに

食事をする中で「食べられない」の声が減り、「早く食べたい」「美味しいね」など、毎日嬉しそうに食べる姿が見られている。自分たちで世話をした野菜が給食に出てくると、「残すとかわいそうだよ」という食物を大切にする意識が生まれこの研究に取り組んで良かったと感じている。

今回の食育の研究を通して、園だけでなく、保護者にも食の大切さを理解してもらい、共に子どもの育ちを見守っていくという関係性が大事なのだということに、改めて気づくことができた。これからも保護者の食への興味・関心を高めるために、より分かりやすい具体的な情報発信を継続していきたい。





子どもたちが主役!!

「共鳴し、磨り合い、高め合う子ども」を育むために

大館市立有浦小学校 教諭 高橋 しのぶ

1 はじめに

本校の研究主題は、「共鳴し、磨り合い、高め合う子どもの育成」である。これを、「のびのびと自分の考えや思いを表すことができる子ども」と捉えた。どのようにしたら、この捉えに近づくことができるのかを考え、実践してきた「教科指導」と「学級経営」について、紹介したい。

2 実践

(1) 「共鳴し、磨り合い、高め合う子どもを育む」ための教科指導

① 文学的文章教材の扱いについて

教材文を教えるのではなく、「教材文で読みのベースを教える」ことにした。

読みのベースをおさえるとは？

- ① 読みの観点を意識しながら、各学年の指導事項を網羅
- ② 分析的に読む力を身に付けること

 - ・クライマックス・ピナクル
 - ・中心人物・対役
 - ・文章構成 などを読み取る・・・

読みのベース①

3・4年
場面の移り変わりに注意しながら登場人物の性情や立場の変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと。

自分の経験と比べて
登場人物の気持の変化
登場人物の性格
場面や情景のつくり変わり

読みの観点

① 学習指導要領指導事項「読むこと」から、「読みの観点」として提示。

子どもたちの読みの実態は様々であるので、この読みのベースを全員が押さえることで授業では同じステージで話合いが展開されていく。

読みのベース②

分析的に読む力を身に付けるために

- ・起承転結 (4つの構成)
- ・序破急 (3つの構成)

☆物語の分析(ぶんせき)☆
★どちらにあてはまる？★

② 「分析的に読む力」を身に付けるために

- 場面の設定 (季節、時間、場所…)
- 作品の構成について (起承転結・序破急)
- 登場人物
- 中心人物
- 対役
- クライマックス
- ピナクル
- 技法・色彩・方言・対比
- オノマトペ・直喩
- 暗喩・伏線・ダツ
- シニ・情景描写
- 繰り返し・擬人法

… などをおさえる。

読みのベースを意識した板書

～4年 プラタナスの木より～

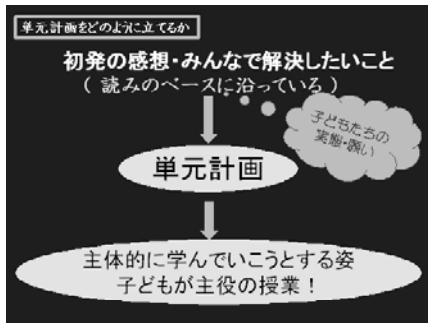
The blackboard contains a diagram of a tree with characters and their roles written around it. On the right, there are vertical notes: '十一月一日 曜日 日曜日', '目指せ！感動文名人', 'プラタナスの木', 'おじいさんは何を伝えるためにあつたのだろうか？', '登場人物 マーチン', '対役 おじいさん', '中心人物 マーチン', 'クライマックス', 'ピナクル', '起承転結', '序破急'.

← 〈展開例〉

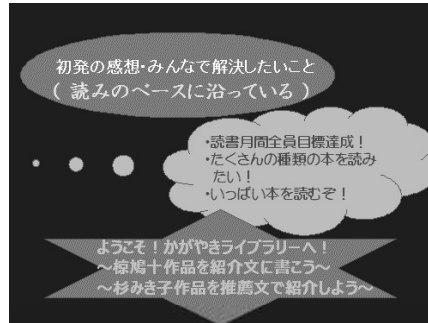
本時の課題：「おじいさんは、何を伝えるためにあつたのだろうか。」

子どもたちは、マーチンを中心人物、おじいさんを対役と捉えた。おじいさんがマーチンに伝えたかったことを話し合うと、作者が伝えたかったことまで見えてくるのではないかという話合いになり、この課題が生まれた。

② 単元構成について



〈展開例〉



読みのベースに沿った初発の感想や疑問に、子どもたちの実態や願いが入り、単元の計画を立てる。実態に同じ、大単元が設定されることもある。

「ようこそ!かがやきライブラリーへ!棕鳩十作品を紹介文に書こう~移みき子作品を推薦文で紹介しよう~」

③ その他

共鳴し、磨り合い、高め合う子どもの育成のための指導法の工夫

板書

- ・意図的に子どもに預ける場面とスペースを作る。

場の設定

- ・話しやすい場作り

子どもと作る! 学習で使う言葉

- ・4月の教科開きで話し合う。随時更新。

1時間の思考の流れがわかるノート

- ・全教科見開き2ページを基本。

左の4点を主に大切にしてきた。板書を例に挙げる。



子どもに預けることで、自分たちで学んでいくんだという気持ちが高まり、思いを表現しようとする子どもが増えた。どの教科においても集団解決の時間は、子どもに黒板を預けることができる。しかし、どのくらいのスペース・時間・部分を預けるのかは、教師側でもしておく。

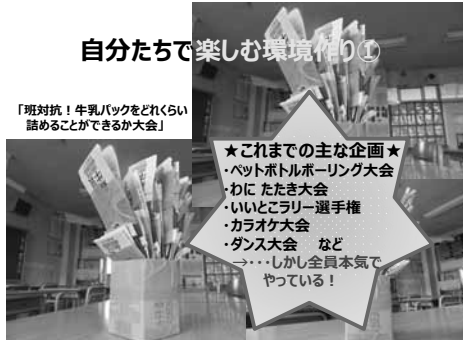
(2) 「共鳴し、磨り合い、高め合う子どもを育てる」ための学級経営

① 教室環境を自分たちで作る!



自由の中に、最低限のルールやマナーを徹底して守ることが鉄則。自分が集団の中で認められているという環境を作る。教師はきっかけを与え、後は子どもたちが自分で考え、工夫を凝らす。自分たちで教室を作っていくという居心地のよさを感じることができるようになる、のびのびと自分の思いを表現する。

② 自分たちで楽しむ環境を作る!



「全員でやる! 全力でやる!」

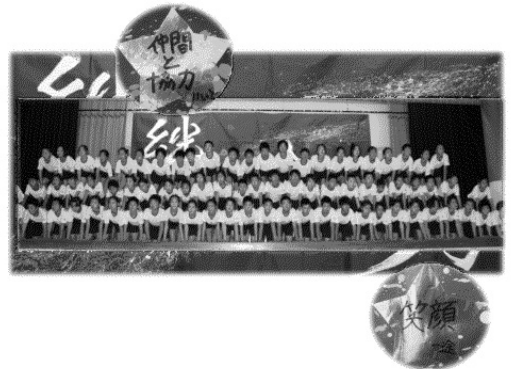
大人数の集団。気の合う友達だけがいるとは限らない。しかし、みんながいるから自分が成長できるんだという集団を育てていく。そのためには、集団の中で認められているんだという自覚を安心できる。その集団の中でも安心できるような環境を作っていくこと。

学級のイベントは、全員参加型。子どもたちは、委員会の仕事がないなどの時間を確認し合い、学級の全員が参加できる時間を設定して、行われる。

帰りの会の係からの連絡の時間はミニイベントの時間として活用。手作りガチャポン大会等、短い時間でできる企画が行われている。大人目線では「そんなこともやるの?」という企画であっても、教師も全力で楽しむ。

3 おわりに

すべての子どもが、のびのびと自分の考えや思いを表すことができるようになるには、どうしたらよいか。それは、教科指導や学級経営において、一人一人が認められている大切な存在だということをお互いが思い合える環境を作っていくことが不可欠であった。どんなときでも、子どもたちが主役であるために、これからも実践を積んでいきたい。





新学習指導要領を踏まえた 小学校家庭科「食」の授業実践

大館市立城南小学校 教諭 杉田 佳介

1 はじめに

2017年に、各校種・教科の新学習指導要領の方向性が示され、来年度から移行期間となる。2020年から小学校、2021年から中学校で全面実施となり、新学習指導要領に準じた教育課程の展開が、早急に求められている。

大館北秋田家庭科教育研究会では、平成29年度の秋田県小学校家庭科教育研究大会での授業実践に向け、新学習指導要領を踏まえた研究仮説を立て、研究を進めてきた。

小学校家庭科新学習指導要領においては、「問題解決型の学習の展開」と「生活実践につながる指導」が重要事項として挙げられている。本研究では、その2点の充実を図るための指導の手立てを工夫した。その内容や、成果と課題について本紀要に記載する。

2 研究の内容

(1) 児童の学習意欲を引き出す工夫

①「身につける力」の活用

本題材では、児童と学習計画を立てる、本時の学習課題を練る際に、「身につける力」を示した。これは、新学習指導要領において示されている、その題材で児童に身につけさせたい力を、児童が把握できるように文言を換えて示したものである。児童が本題材・本時で身につけるべき力を意識して、学習に臨むことができ、学習課題の設定や、振り返りの場面など、授業内の様々な場面で活用することができた。教師のねらいが明確になり、授業の設計にも役立った。

時間	学習内容	身につけたい力
1	○学習の見直しをもち、1食分のこんだての立て方を知る。	★1食分のこんだてを立てる方を理解する力
2-3	○栄養士の先生のお話から、こんだてを立てる時に気をつける観点を知る。 ○自分なりに1食分のこんだてを立て、その問題点や改善案を考える。	★こんだてを立てるときに気をつける観点を理解する力 ★自分の献立を深く見つめる力
4	○献立の改善案についてアドバイスをし、自分のこんだてがよりよくなる工夫について考えを深める。	★自分のこんだてを見つめ直し、よりよくなるように自分なりに工夫を考える力
5-6	○調理実習に向けて、自分で調理計画を立てる。	★効率のよい調理計画を立てる力

↑「身につける力」を示す

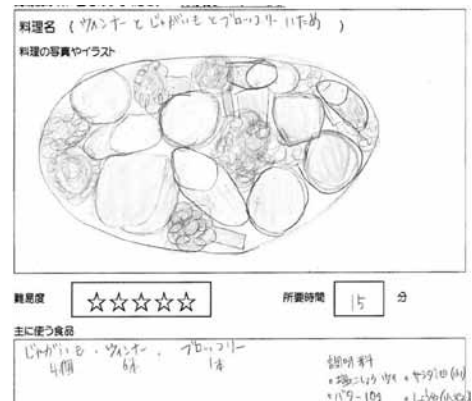
②ICTの活用

導入での教材への出会い、児童の考えの交流、全体での発表、振り返りの視点を示すなど、本題材・本時の様々な場面でICTを活用した。主に使用したICT機器は、①電子黒板②プロジェクター・スクリーン③タブレット端末、である。タブレット端末は授業の際に児童の記述を写真に撮り全体で共有したり、発表の際に児童が操作したりするなど、主に学び合いの場面で活用した。児童が必要な場面を自身でピンチイン・ピンチアウトすることで、伝えたいことを効果的に説明することができた。児童の意欲を引き出すだけことはもちろんだが、課題を容易に把握したり、活発な学び合いを促したりする効果を大いに実感した。

(2) ねらいを達成するための教材・教具の工夫

児童が献立を作成し、自身のために調理する場は「家庭」である。家庭では、その家庭独自のメニューや時間短縮のためのアイデアがあり、それを活用することで、児童は自身の家庭生活を見つめ直し、生活実践意欲の向上につながると考えた。そのため、各家庭の保護者から協力を得て、「我が家のかんたんおかずレシピ」を事前に集めた。そのレシピを、献立作成の際に活用させた。また、小学校家庭科の献立作成において、重点を置く指導事項は「栄養のバランス」である。児童が常に栄養のバランスを自身で確かめられるように、「栄養バランス確かめシート」を活用した。

本時は「創意・工夫」を育成することをねらいとした。そのため、本時での児童の変容と思考の過程を記録し、適切に評価するためのワークシートの構成を工夫した。それらを1枚のシートに記述できるようにすると、評価が容易であった。



↑「我が家のおかずカード」

栄養バランス確かめシート

項目	① 主食類	② 肉・魚・卵	③ 野菜類	④ 豆類
① 主食類				
② 肉・魚・卵				
③ 野菜類				
④ 豆類				

↑「栄養バランス確かめシート」

(3) 協働により問題解決に向かうための言語活動・学び合いの工夫

本題材では、児童同士で考えを伝え合い、練り合う中で、栄養のバランスの大切さに気付かせたかった。献立を作成する際には「栄養のバランス」につながる「色どり」や「味付け」など他の観点があることを児童の発言から確かめた上で、どの観点が献立作成の際には大切であるのかを話し合わせた。児童が相互に考えを伝え合うことで、自身の考えが拡充・深化したように思う。家庭科の学習では、児童が未知の経験に出会う場面が多くある。その際に、既知を生かして学び合うことで、より自身の生活実践につながる、より具体的な思考ができるようになった。これが家庭科の学習における「学び合い」であり、「協働」であると実感した。

(4) 自身の変容を実感し、生活実践への見通しをもつ振り返りの場の工夫

本題材では、本時の学習を振り返る際に、「振り返りの視点」を示した。①前述した「身につける力」がどれくらい身に付いたか、②友達の発言から、自身の考えはどう深まり、自身はどのように変容したのか、③これからの日常生活で自分ならどのように実践できるか、の3点について振り返らせるように心掛けた。

3 終わりに

小学校家庭科の学習は、児童に未来の礎となる知識・技能を習得させることをねらいとしている。「家庭生活」を題材としているため、指導内容は多岐に渡る。家庭との協力を密にして、家庭や地域、社会と関わり、児童が自身の「家庭生活」について考え、実践できるように指導の手立てを講じていきたい。そのための努力を惜しまず、精進したい。



ネマガリダケの皮を使った和紙作りを中心に据えた ふるさとキャリア教育の展開

大館市立山瀬小学校 教諭 三澤正敏

1 はじめに

山瀬小学校のある田代地区は、ネマガリダケの産地であり毎年6月には「たけのこの祭」というイベントも開催されている。また、かつてこの地区にあった越山小学校では、タケノコの皮から和紙を作り、それを卒業証書にしていた。この2つのことから、山瀬小学校では、ふるさとキャリア教育の一つとして、タケノコの皮を活用した和紙作りに取り組み、その製作と活用を図っていくことにした。

2 活動の実際

(1) タケノコの皮が和紙になるまで

- ① 材料集め～選別～乾燥～保存（5月下旬～秋）
- ② 皮を煮る～漂白（10月～11月）
- ③ 紙漉き（11月～12月）
- ④ 乾燥～仕上げ（11月～1月）

※この年に作った和紙の活用は、主に翌年になる。

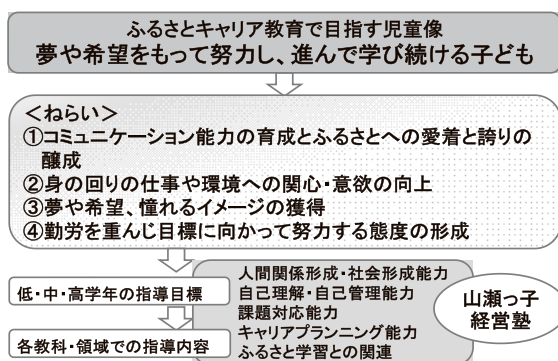


【異学年交流 6年生と1年生】

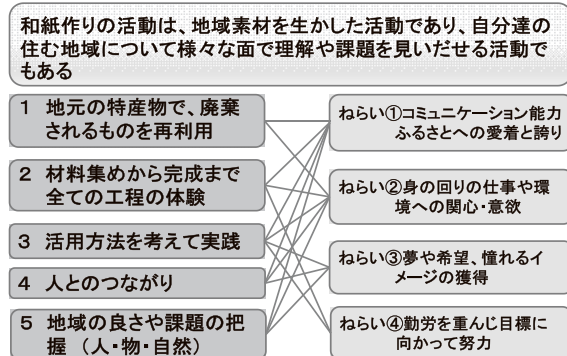
(2) 山瀬小学校のふるさとキャリア教育

平成27年度からふるさとキャリア教育で和紙作りに取り組むにあたり、ねらいとの整合性や、実施に当たっての課題を検証した。結果として図1にあるとおり、和紙作りと本校のふるさとキャリア教育のねらいの整合性は確認できた。【図1-1 1-2】

【図1-1】山瀬小のふるさとキャリア教育

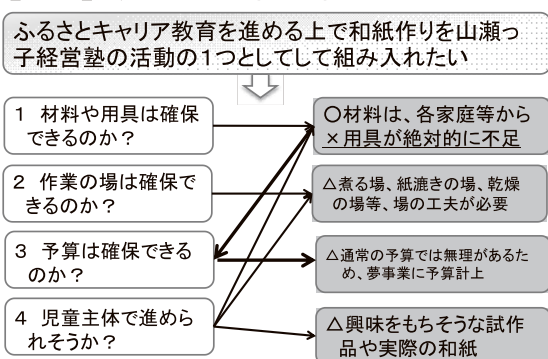


【図1-2】和紙作りとふるさとキャリア教育

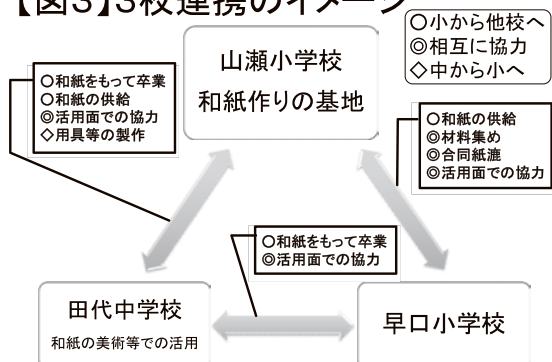


続いて、実施するに当たっての課題を確かめてみた。【図2】結果として27年度からの実施は困難と分かり、一つずつ課題を克服しながら取り組むことにした。27年度は、用具の確保と工程の確認をし、28年度は、和紙作りをふるさとキャリア教育や総合的な学習の時間の年間計画の中に入れ活動する学年を増やすことや、学区での連携の

【図2】 実現の可否の検証(H27)



【図3】3校連携のイメージ



みなさんから声をかけていただき、今後の様々な作業、製品開発などに意欲的に協力いただける運びとなった。

3 成果と課題

ここまで3年間の取り組みの成果としては、①和紙作りと活用の基本形ができてきたこと②全ての工程に児童が携わることができること③中学校区での連携や外部との連携ができてきたこと等が挙げられる。

課題は様々あるが、①作る活動と和紙を活用する活動の2つを学校内や、更に中学校区各校でどのように分担していくか②中学校区での連携を進めるにあたって、予算の配分や職員の共通理解をどのように進めていくか等が挙げられる。

更に児童アンケートの結果、おもしろいと感じた活動や大変だと感じた活動、今後やってみたい活動などが明らかになってきた。来年度以降の活動に是非生かしたい。



【3校の先生方での作品作り】

4 おわりに

当初は、この活動がうまくできるのか不安だったが、いざ活動を始めるとどの工程でも子どもたちの関心は高く、意欲的に和紙作りや作品作りに向かう姿が見られた。また、地域の方々もこの活動に関心を示すようになり、今後の展開が期待される。地域の特産物を学校発信の形で地域に広めていくことで、地域興しの一翼を担う活動につなげていければ幸いである。

模索と3校の先生方の体験を行った。そして、3年目に当たる29年度は、本格的な取組の1年目となった。まずは、紙作りを優先した活動の展開を図った年であった。

(3) 小・中3校の連携

28年度に地区の校長会の提案を受け、この和紙作りの活動を3校で連携して取り組むことにした。まず3校の先生方が経験することで連携の具体的な形が見えるのではということ、28年度は紙漉き体験を行った。29年度は出来上がった和紙で試作品作りを行った。また、どのように3校が協力していくのかの基本線を決めた。【図3】小・小連携や小・中連携の体制が明確になってきた。中でも山瀬小と早口小の6年生が、自分で漉いた和紙を中学校に持ち上げそこで作品作りをするという点が他にはない特徴といえる。また、作業の手伝いとして保護者への協力を求め、「煮る・紙漉き」作業ではご協力いただいた。さらに「元気なたしろ盛り上げ隊」の



集団の力を高めるPA活用法

長期社会体験研修員

大館市立西館小学校 教諭 阿部 英 幸

1 はじめに

今年度、長期社会体験研修員として、前期は大館少年自然の家、後期は大館郷土博物館での研修の機会を頂いた。そこで、前期の研修内容を紹介する。

2 研究の仮説

「集団の特質を踏まえ、必要な要素に対応した PA を実施すれば、集団の力が高まるのではないか。」(協力学級で計3回の検証授業)

3 研究の実際

(1) 事前アンケートの作成、実施

マズローの欲求階層説にある安全・安定、所属、承認といった言葉に基づき、学習指導要領解説を参考に、アンケート項目を設定した。そして、これらの欲求が満たされる集団を「力のある集団」と考えた。作成した事前アンケートの結果は以下の通りであった。

アンケート項目	【学級づくりについてのアンケート】	(4段階評価平均)
1. <u>安全・安定</u>	学級にいると心が落ち着く	(2. 96)
2. <u>交流</u>	学級のみんなで何かするのは楽しい	(3. 58)
3. <u>対話(話す)</u>	学級で、自分の思ったことが言える	(3. 06)
4. <u>対話(聞く)</u>	学級の人は、自分の話を聞いてくれる	(3. 48)
5. <u>相互理解</u>	学級のみんなは、自分のことを分かってくれる	(3. 24)
6. <u>課題の共有と解決</u>	学級で話し合えば、いろんなことが解決できる	(3. 51)
7. <u>役割・責任の自覚</u>	学級のために役立ちたいと思う	(3. 58)
8. <u>協力・助け合い</u>	自分が困っているとき、学級の人は助けてくれる	(3. 31)

(2) PAの分類と検証授業で行うPAの活動選択

PAの活動は、主なねらいによって5つに分類される。数値の低い下線部の3項目を意識して、検証授業の指導案を作成した。PAの分類名と3項目との関わりは次のようになる。

PAの分類名	関連するアンケート3項目	3項目以外の関連項目
1. <u>ウオーミングアップ</u>	<u>安全・安定</u> (交流・対話)	
2. <u>コミュニケーション</u>	<u>交流・対話</u> <u>相互理解</u>	<u>課題の共有と解決</u>
3. <u>楽しい雰囲気づくり</u>	(交流・対話) (相互理解)	
4. <u>課題解決するゲーム</u>	(交流・対話)	<u>課題の共有と解決</u> <u>役割・責任の自覚</u> (協力・助け合い)
5. <u>信頼し合うゲーム</u>		<u>協力・助け合い</u>

(3) 検証授業で行ったPAの活動と児童の気づき

① 検証授業で行ったPA

- ・ ウォームアップ・・・セブンイレブンじゃんけん、惑星旅行、頭、腹、尻星人
- ・ コミュニケーション・・・カテゴリーズ、ラインナップ
- ・ 楽しい雰囲気づくり・・・前後左右
- ・ 課題解決するゲーム・・・手たたきインパルス、連続大縄ぬけ

② 児童の気づき（目標を達成するために）

大切なこと	駄目なこと
チームワーク、アイデア、声かけ、いいね、 気合い、くふう、コミュニケーション、 助け合い、一人一人ちがう	話を聞かない、むだ話、作戦ミス、 無理にさせる、悪口、自分と比べる

(4) 事後アンケートの分析と考察

① 安全・安定

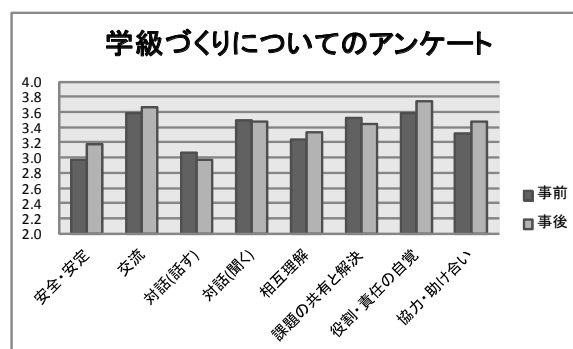
ウォームアップの活動の成果で数値が向上したのではないかな。

② 対話（話す）、相互理解

数値が向上しなかった。小集団で話し合う場を作る工夫が必要であった。

③ 役割・責任の自覚、協力・助け合い

気づきで関連ワードが出されており、児童の印象に残ったため、数値の向上が見られたのではないかな。



4 集団の特質に応じた効果的なPA活用法

事後アンケート結果では、部分的な数値の向上に留まったが、考察での反省も踏まえ、学級の特質に応じた効果的なPAの活動を提案することで、本研究のまとめとする。

集団の特質	効果的なPAの分類名	PAの具体的な活動例
(1) 出会って間もない、緊張感のある状態	安全・安定を高める →ウォームアップ	じゃんけんチャンピオン、せーの、頭、腹、尻星人、復活じゃんけん列車
(2) 人間関係が固定化、けんかが多い	コミュニケーション 楽しい雰囲気づくり	セブンイレブンじゃんけん、ビート、ラインナップ、カテゴリーズ、前後左右
(3) 発表が固定化、話し合いが停滞	課題解決（相談の機会を作る簡単な課題で）	魔法の鏡、あやとり、手たたきインパルス（10名程度の話しやすい人数で）
(4) すぐあきらめる 団結力が弱い	課題解決（すぐには解決しない課題設定で）	惑星旅行、大縄ぬけ、手たたきインパルス（集団全体で）

5 おわりに

今回PA研修の場を与えてくださった大館少年自然の家の職員の皆様に感謝申し上げます。そして、この経験で学んだことや得られたことを学校現場で実践していきたい。



「安心・安全は地域ぐるみで！」

～地域連携安全・安心推進事業～
成章地区で私たちができること

大館市立成章中学校 教諭 千葉彦希

1 「地域連携安全・安心推進事業」 *一部抜粋

(1) 趣旨

本事業は、学校と地域、関係各機関等が連携し、(中略) 実践的な学校安全教育を推進することを目的として実施する。

(2) 事業概要

県内の中学校区を推進地区に指定し、「地域連携」を推進する中で、当該地区の学校・家庭・地域が連携して行う「学校安全に係る諸活動」を支援するとともに、当該地区の学校安全を担う教員を養成する。

2 本事業の実践

(1) 学校と地域、関係機関等との連携に関する事項

※ ○は協力体制の構築 ◇は連携した活動

- 地域連携安全・安心推進事業実行委員会 (年3回)
- 自治会長連絡協議会役員会 (協力依頼)
- 自治会長連絡協議会 (地域防災活動協力依頼)
- 地区民生委員会 (事業説明, 協力依頼)
- 市防犯協会十二所支部総会 (事業説明)
- 小・中連携部会 (連携の確認)
- ◇地域防災活動 (小・中学生, 保護者, 自治会長, 民生委員, 地域住民等による調査活動)
- ◇異常気象に伴う砂防河川災害の学習会 (小学生, 国土交通省職員)
- ◇被災地視察 (参加者: 小・中学生, 保護者, 地域住民, 教職員, 県保健体育課)
- ◇十二所地区小・中・高PTA連絡協議会 (小・中学生成果発表)
- ◇避難・安否確認訓練, 避難所モデル公開 (幼・小・中学生, 保護者, 地域住民, 教職員, 生活支援コーディネーター, 市防災アドバイザー等 総勢約500名の参加)
- ◇町内奉仕作業 (小・中学生, 保護者, 自治会長, 地域住民, 教職員等による防火設備周辺の除雪作業)
- ◇AED講習会 (小・中学生, 保護者, 地域住民, 教職員, 消防署等)
- ◇熊から身を守る安全教室 (小・中学生, 猟友会, 警察との連携)
- ◇不審者対応教室 (小学生, 大館警察署)
- ◇道路標識設置活動 (小学生, 道路管理者)



地域連携安全・安心推進事業
実行委員会



避難・安否確認訓練

○で示した関係各団体等には、校長が中心となり事業説明や協力の依頼を行った。また、連絡・調整を重ねることで、総勢500名の参加者による安否確認・避難訓練を実現することができた。

(2) 本校の地域防災活動に関する事項

- 地域防災活動① 課題発見
- ◇地域防災活動② 高齢者宅の確認 花ボランティア活動と兼ねる。
(小・中学生, 保護者, 教職員, 地域住民, 自治会長, 民生委員, 生活支援コーディネーター)
- 地域防災活動③ 大館市防災マップ確認
- ◇地域防災活動④ 各町内：過去の災害・防災設備・実地調査
(小・中学生, 保護者, 自治会長, 民生委員, 地域住民)
- 地域防災活動⑤ 町内の防災マップ作成
- ◇地域防災活動⑥ 避難行動を考える① 仮想都市からの避難
秋田県地方気象台資料活用
- 地域防災活動⑦ 避難行動を考える② 中学生が在籍しない町内からの避難行動
- ◇地域防災活動⑧ 避難行動を考える③ 自分の町内からの避難行動 (消防署講話・講評)
- ◇防災マップ地域公開
- ◇十二所地区小・中・高PTA連絡協議会 (小・中学生による成果発表)



①課題発見 グループ協議

*** ○は主に中学校での活動 ◇は他と連携して行った活動**

「地域に守られる子どもから、地域を担う人間へ」というふるさとキャリア教育のねらいのもと、「成章地区でわたしたちができること」というテーマで総合的な学習の時間を行ってきた。本事業を受け、地域防災活動を総合的な学習の時間を中心に推進してきた。課題発見を通して「地域の人と共に助け合い、自分たちの命を守るためには」と生徒が課題設定し、学習活動を進めてきた。

3 終わりに

(1) 生徒アンケート

設 問	実施時期	肯定的回答	否定的回答
住んでいる地域が災害に対し、安全だと感じていますか。	事前	53%	47%
	事後	29%	71%
あなたや家族は、自宅以外の場所へ避難しなければならない事態に備えて対策をとっていますか	事前	22%	78%
	事後	62%	38%
あなたは通学途中に地震にあったとき、どういった行動をとればよいかかわっていますか。	事前	53%	47%
	事後	100%	0%

危険性の認識

家庭の防災意識の高まり

知識・心構えの定着

(2) 実践を通して

- 地域が一体となった避難・安否確認訓練の実施 → 災害時の協力体制の構築
- 地域関係団体との協力体制の構築、強化 → 協働的な活動、地域の核となる学校
- 関係団体からの専門的な助言・支援 → 充実した学習活動、真の信頼関係の構築
- 生徒の防災意識の高まり (危険の認識、防災に関する知識・行動等)



考え、議論する中で考えを深める生徒を 育てる道徳の実践

大館市立東中学校 教諭 小坂 亜紀子

1 主題設定の理由

道徳の「特別の教科」化に伴い、現在の道徳の時間において「考え、議論する道徳」への転換が図られようとしている。それは新しい時代に求められる資質・能力の育成にとって非常に重要なことである。それに向けて、「主体的・対話的で深い学び」の視点の中でも、「自分と異なる意見と向き合い議論する」という点に重点を置いた授業改善に取り組むこととした。資料選定や発問を工夫し、生徒同士が議論する授業を構築することで、人とのかかわりを見つめ、社会性をもって力強く生きる生徒の育成につながると考え、この主題を設定した。

2 研究のねらい

「考え、議論する道徳」に向けて、「多面的・多角的に考える」授業が求められている。道徳における「多面的」とは、「一つの事象をさまざまな立場から検討し、視野を広げることで価値に気付く」、「多角的」とは「自分ならどうするか考え、自分と異なった意見を聞きながら自分の考えを明確にし、価値に気付く」と捉え、授業を展開しようと考えた。異なる立場から多面的・多角的に考えることで、多様な考えが生まれ、自分とは異なる意見をもつ他者と議論することや自分の中での見方の転換を通して、相手を認め、自ら生き方を考える生徒に育ってほしいと考え、ねらいとした。

3 研究の内容

【多角的な考え方で議論した実践】～自分とは異なる意見と向き合う～

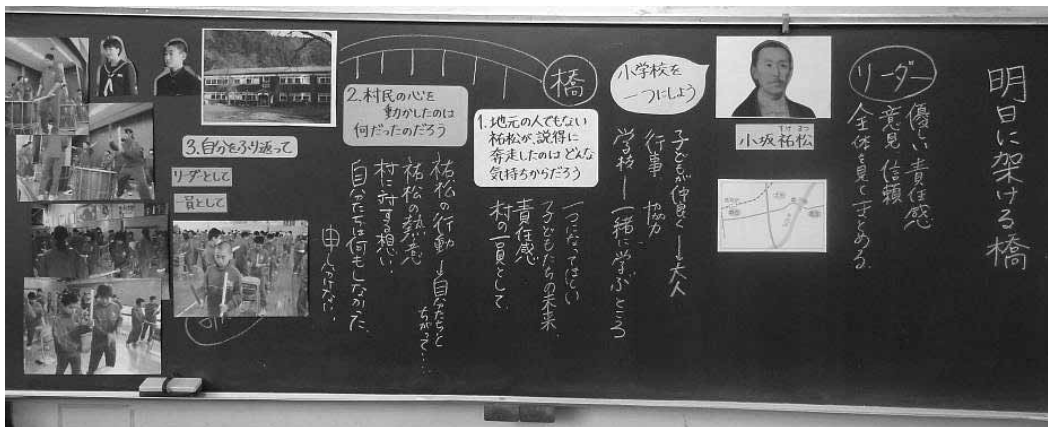
主 題 名	守るべき命	内容項目	D－(19) 生命尊重
資 料 名	ハゲワシと少女	出 典	ケビン・カーター氏の撮影した写真を使用
資料の内容	ハゲワシに狙われているアフリカの難民の少女を、助けることよりも撮影することを本能的に選んだジャーナリストの行動について考える。		
主な発問	1 自分だったらどうするだろう。 2 カーター氏の行動を支持するか、支持しないか。その理由は何か。 ③ 相反する「支持する」「支持しない」の意見で共通することはないだろうか。 →どちらも「命を守る」という点では同じであることに気付く。		



←「支持する」
「支持しない」
二色の円グラフで自分の考えを表示。
微妙な心の動きを表しやすく、自分の考えを発表しやすい。

【多面的な考え方で議論した実践】～中心的な発問で視点を変えて考える～

主 題 名	よりよい社会	内容項目	C-(12) 社会参画 公共の精神
資 料 名	明日に架ける橋	出 典	明日をひらく
資料の内容	仲の悪い二つの村の間に橋をかけようとし、村人の説得に奔走した村長の苦悩について考える。		
主な発問	<p>1 村長はどんな気持ちから「小学校を一つにしよう」と考えたのだろう。</p> <p>2 地元の人でもない村長が説得に奔走したのはどんな気持ちからだろう。</p> <p>③ 村人たちの心を動かしたのは何だったのだろう。</p> <p>(補助発問) 村人たちはどう思っていたのだろう？</p> <p>→視点を「村長」から「村人」に転換することで、よりよい社会・集団を作るには、リーダーだけでなく、集団の一員一人一人が頑張らなくてはならないことに気付く。</p>		



←板書もねらいに迫るために重要。視覚的に生徒の思考を手助けする役目があるので、効果的な板書を心がけたい。

主 題 名	自分と向き合う	内容項目	A-(4) 克己と強い意志
資 料 名	二人の弟子	出 典	私たちの道徳
資料の内容	修行を乗り越えた弟子、智行と挫折した弟子、道信。道信がまた修行したいと寺に現れる。そんな道信を許す上人と二人の弟子の心情を考える。		
主な発問	<p>1 道信は雪の下のフキノトウを見てどんなことを思ったのだろう。</p> <p>② 「人は皆、自分自身と向き合って生きていかねばならない」という言葉にはどんな思いが込められているのだろう。</p> <p>(補助発問) 「人は皆」とは、誰のことか？</p> <p style="text-align: right;">← 視点の転換</p> <p>智行は何と向き合わねばならぬのか？</p> <p>3 今、自分が向き合わなければならないことはなんだろう。</p>		

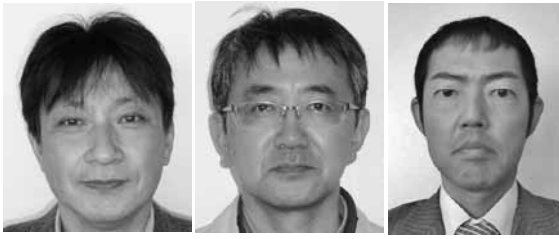
4 成果と課題

【考え、議論するためのポイント】

- 議論するにふさわしい資料の選定 (多面的・多角的に考えられる資料)
- 発問の吟味 (人物への共感を引き出す発問か、否定する発問か、分析する発問か)
- 議論からねらいとする道徳的価値への、教師のコーディネート

(出された意見をどう使うか、どう切り返すか、そのタイミングは?)

今後に向けて課題と感じたことは、「考え」をもたなければ「議論」できないということである。考えをもつためには、世の中や身の回りのことへの興味・関心や広い知識が必要である。日頃の教育活動すべてが「考え、議論する」生徒の育成につながっていることを念頭に実践を重ねたい。



「大館桂桜高等学校工業科の取組」 ～生徒の多様な進路の実現に向けて～

機 械 科 乳 井 京 介
電 気 科 近 藤 哲 也
土木・建築科 鷹 背 浩 輝

1 大館桂桜高校工業科の概要

大館桂桜高校は市内3校が昨年度統合し、現在2年目となっている。設置学科は旧3校の特色を反映し、機械科、電気科、土木・建築科の工業科3学科、生活科学科、普通科と5学科で、多様な進路に対応できる学科編成となっている。生徒数も多く、現在699名が在籍している。工業科は、1クラス定員が35名で、機械科104名（女子3名）、電気科101名（女子10名）、土木・建築科103名（女子20名）である。

校訓は、「至誠」「創造」「錬磨」で、誠実で礼儀正しく、創造性豊かで、日々努力する生徒像を目指している。教育理念は「生徒一人ひとりの能力を最大限に伸ばし、地域社会を愛し、自立してふるさと秋田の発展に貢献できる人間の育成を目指す」となっており、工業科各科の取組の原点はこの教育理念にある。

2 機械科の取組

機械科では、機械技術を活かしたものづくりを学び、地域貢献できる実践的技術者の育成を目標に、技能の習得、資格取得、地域交流を三本柱とした取組を行っている。最終的には生徒が自ら進路を定め、それを実現させる力を身につけさせることにある。そのために以下の3つ具体的方策を実践している。

(1) 機械科技能スタンダードの設定

3年間で身につけるべき機械に関する技能を、基礎、標準、応用、発展の4段階に分類し、具体的に示している。また資格取得についても、難易度で4段階に分類し生徒の取得意欲を高めるようにしている。これは、企業に対して技能を保証するものとなっている。

(2) ジュニアマイスター顕彰制度の奨励

生徒に社団法人全国工業高等学校長協会が主催し全国の工業高校生が挑戦しているジュニアマイスター顕彰制度の認定を目標に資格検定に挑戦させている。生徒には資格取得表を配布し、3年間を見通した計画を立てさせている。

(3) 地域貢献活動への参加

機械科では、「体験型ものづくりコーナー」を大館圏域産業祭と大館市生涯学習フェスティバルに毎年出展している。今年度また、城西小学校との交流授業で、金属を溶かして砂型に流し込む簡易鋳造体験を6年生に対して毎年実施している。ものづくりで地域に貢献する精神を養うようにしている。

生徒は、このような取組によって専門技術を身につけ、資格取得に挑戦しながら3年間で立派に成長し、技能の担い手として県内外の優良企業に就職し、活躍をしている。今後もこの取組を継承し発展させていきたいと考えている。

3 電気科の取組

(1) 電気科の各学年の目標

1年生	・2年生からの専門分野の学習の準備として、電気基礎や情報技術基礎などの基礎知識を身につけるとともに、全工協の検定試験に合格する。
2年生	・電気技術コースと情報通信コースに分かれて専門知識と技術を深める。 ・国家試験の取得と、専門知識や技術を生かした地域貢献に参加する。
3年生	・専門分野を深め、進路実現に向けた情報収集などの準備をする。 ・実習や課題研究を通じて、実践的な知識や技術を身につける。

(2) 取組の内容

1年生	・専門の授業(10h/1w) ・企業見学 ・地元企業主催の電気工事体験学習等
2年生	・専門の授業(12h/1w) ・インターンシップ ・ふれあい安全訪問(社会福祉協議会、電気関係企業とともに技術ボランティア)
3年生	・専門の授業(16h/1w) ・就職前の企業見学

(3) 成果と課題

生徒の多様な進路の実現に向けて、その基礎となる専門知識や技術を学習しており、電気工事士等の合格者も年々増加傾向。また、技術ボランティアを通じて地域に目を向けさせ、地域を支える人材の育成にも重点を置いてきたものの、ここ数年の進路の状況を見ると、県外への就職者が過半数を超えている状況である。

4 土木・建築科の取組

土木・建築科では、1年次に全員共通の科目を学習し、2年次から土木コースと建築コースに分かれてそれぞれのコースで建設に関わる技術者を目指して学習している。

土木コースでは実習を重視し、2・3年生で計8単位を設定している。内容は、土地の高低差や角度、面積等を測る測量に関するものや、コンクリートの配合に関するもの等がある。最近では、建設現場でドローンを活用した測量が行われていることから、本校でも導入して新しい技術に対応できるようにしている。建築コースでは、実習を2・3年生で計6単位設定している他に、製図も計6単位設定している。実習では、ものづくりマイスターを招聘して大工技術の基礎を指導してもらい、在来工法による軸組を毎年製作している。製図は、手描きの製図を重視して住宅の平面図や立面図等を描いて基礎を固める他、CADによる製図も指導している。資格取得については、土木及び建築の2級施工管理技術検定の合格を目指して全員受験をしている他、測量士補や技能士の取得、車両系建設機械運転の特別教育等を奨励して、将来に活かせるようにしている。また、地域との連携にも力を入れており、大館市生涯学習フェスティバルや圏域産業祭での木のおもちゃ作り、鷹巣技術専門校、比内支援学校、城西小学校で交流授業を行い、ものづくりを通してコミュニケーション等様々な事を学ぶ機会を設けている。

卒業後の進路については、地域を守る建設業の他、県外の手豪メーカー等にも採用され各地で活躍している。また、製造業や福祉関係の進路を選択する者にも対応している。4年制大学や専門学校への進学希望者にも対応し多様な進路を実現している。



若者の地元定着の推進と地元企業情報の早期提供 ～ いつでも職場体験！ 企業紹介ムービー～

大館市産業部商工課 菅原 純

1 はじめに

大館市の有効求人倍率は平成27年5月から1倍を超え、平成29年12月現在1.45倍と企業からは労働力不足の声が寄せられている。

不足する労働力確保の手段として、若年者の地元就職の促進と高年齢者が活躍する生涯現役社会の構築に取り組んでいるところである。

今回は、若者の地元定着推進に向けた地元企業情報の早期提供について説明するとともに、その成果品の活用について説明する。

2 大館市の現状

平成26年5月「日本創生会議」において、大潟村以外の県内全自治体が、平成52年までに若年女性が半減する「消滅可能性自治体」とされ、18～23歳の若者の県外への進学や就職が社会減の主要因となっている。

大館市では平成27年12月に大館市人口ビジョンと大館市総合戦略を策定、更に平成28年4月に第2次新大館市総合計画を策定し、持続可能な行政体の維持のために、今後の目標や基本的方向、具体的な施策に取り組むこととした。

3 取組

高校卒業予定者を中心とした、若年者地元定着に向けた取組として、下記事業を実施しており、秋田県・大館市・商工団体等が連携して、早期に就職に関する情報提供を行うことで、若年者の地元就職を推進している。

- ・早期求人提出要請（大館市ほか）

大館市、高等学校、北秋田地域振興局、大館公共職業安定所が連名で商工団体に対して求人の早期提出要請を行い、求人情報の早期提供により、高校卒業予定者が就職先を早期に検討できるように促す。

- ・インターンシップとオープンオフィス事業の実施（大館北秋雇用開発協会）

高校生が地元企業を訪問し、仕事の内容等を体験することで、地元企業への理解を深める。

・企業情報の提供（大館北秋雇用開発協会）

地元企業の情報を取りまとめ、高校へと提供する。

冊子での配布 → インターネット上での発信（テキスト・画像）

↓ 機能強化

インターネット上での発信（映像コンテンツ）

QRコードチラシの配布と YouTube の活用

・新規高卒者求人求職情報交換会の開催

求人提出した地元企業と就職希望の卒業予定の高校生と面談することで、地元企業の理解を深める。（毎年7月開催）

↓ 企業情報の早期提供

2月・3月に在校生（2年生）向け企業説明会を開催

・奨学金返還助成制度（大館市、秋田県）

奨学金を返還する新卒者・既卒者を対象に返還した奨学金の一部を助成することで市内就職を推進する制度。

4 成果

大館市では、これまで地元企業情報の提供のため、大館北秋雇用開発協会による企業情報誌の発行を支援してきた。

現在、情報発信手段として、冊子よりもインターネットの活用が有効であることから、大館北秋雇用開発協会のホームページへの企業情報掲載と QR コード掲載チラシにより、高校生へと情報伝達している。

平成28年度からはこの取組を一歩進め、3分程の動画による情報発信に取り組んでいる。動画はDVD形式で小中学校、高校、県内大学、更に首都圏大学へと配布するとともに、動画投稿サイトの YouTube を活用し、QRコード掲載チラシの配布により、高校生から大学生へ、そして市内在住者から首都圏在学者まで広範囲に情報発信に努めている。

5 おわりに

秋田県と大館市では、労働力確保と人材確保のため、高校生・大学生の地元就職に向けた取組を、強化しているところである。小中学校においても地元企業情報DVDをふるさとキャリア教育における教材として活用していただきたい。

また、今回の研修会などの機会を捉え、産業界と教育機関とのつながりを深めて参りたい。

全体会 提言「未来に向けて進化を続ける大館の教育」

大館市教育委員会 教育長 高橋善之
 学校教育課長 山本多鶴子

1 未来大館市民の意識の変化

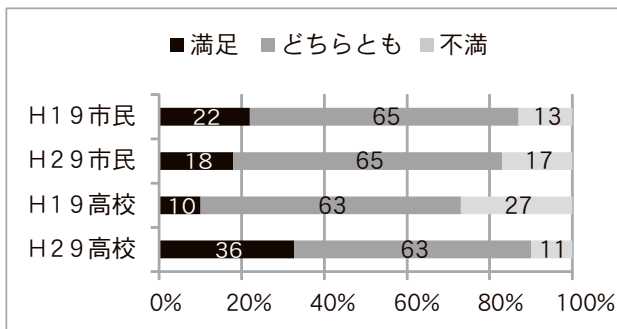
平成19年の高校生の意識を見たときに愕然とした。若者の1割しか満足でない街、そういう街には未来はない。もし、ふるさとキャリア教育を実施していなかったら大館は本当にデットゾーンに沈んでいたであろう。

商工会議所会頭が、挨拶の中でデータを取り上げ「大館の高校生の意識が10年前に比べ不満が3分の1になり、満足が3倍になった。これは数年前から取り組んでいるふるさと

キャリア教育の成果が出始めた結果だと思われる。教育というものの重要性、即効性はないが確実に人の気持ちを変えうることを痛感した。」という内容であった。教育がこのように産業界の方々からも価値を認めていただいたことは大変嬉しく、これら0.1%ずつの積み重ねが、おそらく先生達がやってきた様々な子どもたちとの関わりや授業の中で築き上げられた数値だと思うと本当にありがたいと思う。

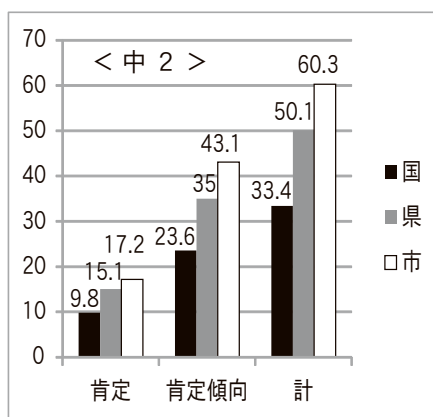
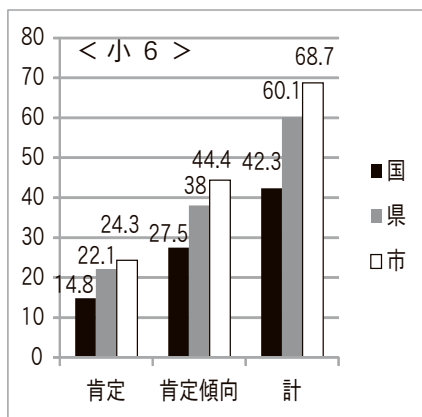
全国学力学習状況調査の質問紙の結果でも、国や県と比較し非常に高い数値が出ている。大館の子どもたちが高いのは、キャリア教育の力である。ふるさとで気概を持って生き抜いていく、ふるさとをこういう未来に変えていきたいという志を持っているのが大館の子どもたちであり、質問紙の結果はその違いだと分析している。

【市民と高校生の「まち」の満足度】



(建設部都市計画課 都市再興基本計画住民アンケート調査)

Q 地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがある。



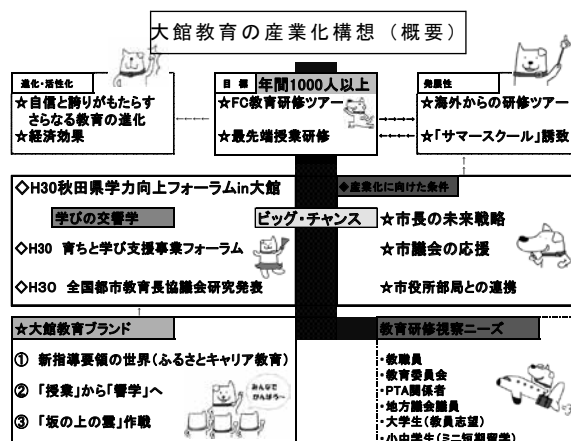
(H29全国学力学習状況調査)

2 「大館盆地を学舎に 市民一人一人を先生に」

今まで「大館盆地を教室に、市民一人一人を先生に」というコンセプトで進めてきた。山々に囲まれたこの大館盆地が1つの独立した世界のように感じられ、その中で、子どもたちが歴史、文化、産業、人、生き方を学び、1つの教室のようだと考えたからである。その後ふるさとキャリア教育は進化を続け、文科省とか国立政策研究所を初め、全国から多くの教育関係者が大館を訪れ、大館の様々な教育実践を調査、研究している。このような現状を踏まえたときに、大館の教育はもはや小さな教室ではなく、多彩で先駆的な教育実践、実験、実習室を備えた学舎ではないのかと思えるようになった。大館を訪れる方々も「大館は、教育の理念や本質、最先端の教育実践を体感しながら学べる教育の学校なんですね」とおっしゃる。そこで今後は、「大館盆地を学舎に、市民一人一人を先生」というコンセプトでさらに展開していきたいと考えている。

3 大館教育の産業化構想

地方都市における教育が果たすべき社会的な役割を考えた場合、大館の教育の産業化は必然的な進化過程である。地域経済という観点から考えた場合、大館の経済状態が今以上に衰退することは、阻止しなければならない。しかし、経済も一旦デットゾーンまで沈んでしまうと、人口減少と同じで、回復はほぼ不可能である。そうすると、未来大館市民の育成による「少数精鋭の街大館」の構築という未来戦略は根底から崩壊してしまう。大館が更なる産業を興し、外界と交易し、外貨を獲得する体制をいち早く構築することが、大館全体の喫緊の課題なのである。教育の立場からこれに貢献しようというのが、教育の産業化であり、教育ツーリズムである。これを、産業化という形で進化するためには、大館教育の更なる品質向上とブランド化、そして全国への情報発信、そして受け入れ体制の構築が不可欠な要素となる。



折しも平成30年度は、大館の教育を全国に発信する絶好の機会である。5月の全国都市教育長協議会研究発表(一関市)、10月には育ちと学び支援事業フォーラム、そして11月には秋田県学力向上フォーラムが開催される。この学力向上フォーラムでは、大館の全小・中学校の授業を見ていただきたい。現在の大館は、全ての学校が公開できるレベルにあると自信をもっている。と同時に、これを機会にさらに大館の授業力のクオリティを上げたいと考えている。ぜひ、それぞれの学校の特色を生かした授業を公開し、全国の先生方との授業研究会を通して、大館の教育の質を、その魅力を発信して欲しい。外からの刺激と高い評価は、大館の教育に更なる誇りと進化をもたらす。加えて、大館が発する希望の光が、全国の教育や地方都市の発展に寄与していくことができるのなら、教育に関わる者として、まさに本望であると思っている。以上のような未来戦略としての教育の産業化であり、教育ツーリズムであり、そして学力向上フォーラムなのである。

4 全国に発信する教育ブランド

本市は、この6年間で20もの団体表彰をいただいている。今年度は、花岡小の博報賞、下川沿中のキャリア教育連携推進表彰、釈迦内小S Pの東北電力地域活性化P J。特に花岡小の授賞は、チャレンジ授業及びベーシック授業と呼ばれる「授業」が切り口となった。国で提唱している「対話的・主体的で深い学び」の最先端の実践例として認められたものであり、この授賞の意味は大きい。つまり、大館ふるさとキャリア教育はもう新学習指導要領の世界を具現化したものであり、最先端のアクティブラーニングが本市にある。つまり、新指導要領が示すベクトルの上を、結果的には7年先行しているのが大館の教育なのである。

主体的・対話的で深い学びを作る授業は、全国の先生方が最も関心を持ち思い悩んでいるテーマである。どんなに素晴らしい教師主導型一斉授業でも、学び合い型授業にはかなわない。しかし、数値的学力を最優先する市町村教育委員会や学校にとっては、教師主導型の授業を捨てるのは極めて勇気のいることである。おそらく、多くの市町村や学校が、表面的にはアクティブラーニングを取り入れ、装いながら、当面は本当に大丈夫かと様子見をするのが、数年続くであろう。その中で、大館のアクティブラーニングの授業だからこそ、学び合いの授業だからこそ、高い数値的学力につながっていることを実証するのは、かなりの衝撃的なことなのである。

5 授業の進化過程

大館の授業は、この8年間で大きな進化を遂げてきた。基本形は、県と同じように分かる授業できる授業であり、目標や課題設定に至るスキルで大館の改革が始まった。そして、児童生徒の共感的な学び合い、さらには伸びやかな知性、しなやかな感性、豊かな人間性を育む授業に進化してきた。その後、キャリア教育的な視点が加わり、おおだて型学力アクション・シンキング・チームワークが組み込まれた発展型が生まれた。大館の授業のスタンダードである。学習活動を通して、大館市民基礎力や実践力を養う授業である。さらに、近年になって、それぞれの学校それぞれの先生方が様々な発展型を開発してきた。例えば、花岡小チャレンジ授業とか、中学校で行われている生徒指導の3機能：自己決定、自己有用感、共感的な人間関係で組み立てた授業である。おそらく大館のあちこちで先生方と生徒達が、このような心揺さぶる学び合いの授業を展開しているのだろう。今私たちが子どもたちと共に挑んでいる授業イノベーションの行く手には、まだまだ様々な授業へと進化する新たな鍵や素材がある予感がする。いち早くそれを見出し具現化して、その価値を全国へと発信していくことは、私たちの務めなのである。

6 授業から「響学」へ そして「学びの交響学」

授業はそもそも「業を授ける」という言葉である。大館が今やっていることは、それにそぐわない世界に進化している。子どもたちはもちろん、先生方も授業を見ている私たちさえ幸せに至る学びの型、これは授業ではない。大館の最大の特色は共感的な学び合いである。これはどの授業でも同じである。知性の練り合い、感性の磨き合い、そして人間性の感化と進化、知性感性人間性が連動して響き合いながら深い学びに至る学習過程は、「響学」というのが一番近いのではないか。

学力向上フォーラムでは、そのような「響学」の授業を提示したい。授業の百花繚乱の公開で、大館市の各学校相互に共鳴し合い進化していくという様子は、まさに「学びの交響学（シンフォニー）」という形でないかと考えている。学力向上フォーラムでは、大館市全体で「学びの交響学」を奏でて、その調べを全国に発信したい。

7 坂の上の雲戦略

日本が近代国家の建設を目指しスタートして150年たった。教育も個人主義に偏り、人々は孤立して社会を進化させるべき志やパワーを消失した状況が今ではないか。大館は幸い、経済的にも文化的にも都会から離れている地方都市であり、離れている分、経済至上主義や行き過ぎた個人主義に影響される部分は少ない。だからこそ、地域社会も教育も極めて、質実として謙虚であり、全国に先駆けて、ふるさとの未来を切り拓こうという気運が生まれたし、総力を挙げてふるさとキャリア教育に邁進できている。

私たちが今大館で築こうとしているのは、人と社会の幸いであり未来である。そしてこの大館が、いずれ全国の地方都市を、そして国の在り方さえも変える希望の灯火になっている。これが、私たちが担う歴史的な役割である。権力と財力は一時的に人を動かす。しかし、人を変える力はない。人を変えることができる力を持つのは教育だけである。10年、もしかしたら半世紀、いや一世紀かかるかもしれないが、真の教育は確実に人間の意識を変革し、志を創り上げる。その力の集積により、いずれは社会自身も進化していく。そういう時代になることを信じている。

大館の教育のベクトルは、まっすぐに未来へと伸び、そして私たちの歩みは、着実に「坂の上の雲」へと接近している。この1年あらゆる力を合わせて共にベクトルを進めていきたいと思っている。

平成29年度 教育研究所 事業報告

教育研究所

1 学習指導方法及び教育内容を充実させるための指導・援助

事業名	事業内容等
①学力向上施策 おおだて型学力推進委員会との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・標準学力検査(NRT)の実施 *分析は各校ごと ・広報「SHI・N・KA」の発行 HP掲載 ・経費補助(用紙代)学年及び教科 【知能検査】 小4年・6年、中2年 【標準学力検査】NRT 小2・3年(国語、算数) 小4～5年(国語、算数、社会、理科)6年(社会、理科) 中 1年(国語、数学、社会、理科) 中 2年(国語、数学、社会、理科、英語) 中 3年(社会、理科、英語)
②情報教育の推進 情報教育推進委員会との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・ICT活用研修講座実施 8月1日(火) 会場：秋田職業能力開発短期大学校 内容：タブレットPC(小中各基礎編・活用編) 日常的なタブレット活用をめざして 情報モラル講話 ・情報モラル指導・ICT活用実践事例集発行 (2月)
③学校訪問	<ul style="list-style-type: none"> ・大館市教育研究会「総合研究会」の巡回 ・指導主事等による学校訪問 ・各校内就学指導委員会 ・教育委員による学校訪問 ・幼稚園・保育所等訪問
④大館市教育委員会研究委嘱校への指導・援助	・休止
⑤大館市教育研究会	<ul style="list-style-type: none"> 4月12日(水) 第1回総合研究会 教科外部会 10月26日(木) 小学校第2回総合研究会 10月27日(金) 中学校第2回総合研究会 11月10日(金) 教科外・合同部会
⑥教育課程に関する事項	・平成29年度教育課程実施計画書の確認と平成28年度教育課程実施報告書の確認
⑦ふるさとキャリア教育の推進	<ul style="list-style-type: none"> ・ふるさとキャリア教育推進事業 コーディネーターの配置 ・子どもハローワークの運営 キャリア・パスポートの配付 ・ふるさとキャリア教育夢事業 ・起業体験推進事業

2 教職員の指導力向上をねらいとした研修会の企画と実施

事業名	事業内容等
①初任者研修	<ul style="list-style-type: none"> 第1回 4月26日(水) 大館市内諸施設及び企業等見学 第2回 8月18日(金) 教育長講話(子どもハローワーク体験)
②大館市内諸施設及び企業等見学会	<ul style="list-style-type: none"> 4月26日(水) ふるさとキャリア教育講話 参加者：初任者、市外からの転入職員 見学先：大館郷土博物館、秋田ウッド、鳥潟会館等
③特別支援教育支援員研修	<ul style="list-style-type: none"> 5月8日(月) 特別支援教育支援員研修会 *北教育事務所の支援員配置校研修との連携
③授業力向上支援	<ul style="list-style-type: none"> 6月～10月 授業マイスター等の授業参観研修 14授業提示 69名参加 8月22日(火) 授業力向上支援研修会 講話：「自分の授業を外側から見る力を付ける」～授業改善～ 講師：米澤貴子教育専門監
④夏季研修会 ※2年に1度の受講	<ul style="list-style-type: none"> 8月1日(火) 会場：秋田職能短大 17講座 326名 内容：通常学級における発達障害のある子どもの支援 「考え、議論する道徳」への転換に向けて 大館歴史まちづくりの紹介

⑤講師研修会	第1回 6月7日(水) 会場:上川沿公民館 講話:「授業力向上について」 講師:大館市教育委員会 高橋善之教育長 第2回 12月1日(金) 会場:中央公民館 講話:発達の気掛かりな子どもの理解と支援 講師:子ども課 臨床心理士 奥山 紗綾氏
⑥小学校英語教育研修会	第1回 9月~12月 ・今後の英語教育の動き ・研修ガイドブックより 第2回 2月~3月 ・移行期間のカリキュラム ・大館スタンダード
⑦第28回教職員研究実践発表会	1月11日(木) 会場:中央公民館・市民文化会館 実践発表 18題 全体会 提言「未来に向けて進化を続ける大館の教育」 大館市教育委員会

3 市民及び学校の要望に応える教育相談の推進

事業名	事業内容等
①教育相談事業	<ul style="list-style-type: none"> ・大館おおとり教室~適応指導対象児童生徒への指導・援助 ・幼児通級指導教室「育ちの教室・ぐんぐん」 ・スクールカウンセラーの派遣(第一中 北陽中 東中 比内中) ・心の教室相談員の配置(南中・成章中・田代中)
②いじめ・不登校対策事業 いじめ・不登校対策事業推進委員会との連携	<p><いじめ・不登校対策事業推進委員会> 会場:大館市立中央公民館 第1回 4月27日(木) 委嘱状の交付、基本方針の検討 第2回 2月5日(月) まとめ</p> <p><子育て相談会> 会場:中央公民館 6月1日(木) 相談件数4件(4人) 講話34人 講師 佐々木百合SC 村松勝信教育専門監 9月28日(木) 相談件数5件(7人) 講話22人 講師:佐藤正好比内支援学校長 1月26日(金) 相談件数7件(7人) 講話35人 講師 比内支援学校 畠山佳子教諭</p> <p><ふれあい楽しみ会> 看護福祉大ボランティアの協力 第1回 9月8日(金) 場所:リフレッシュ学園 参加者22人 カヌー体験・野外炊飯 第2回 12月8日(金) 場所:大館市中央公民館 参加者28人 ケーキづくり、ゲーム他</p>
③満5歳すてっぷ相談(親すてっぷ)	<ul style="list-style-type: none"> ・満5歳児の保護者学習会(就学に向けた子育て講話) 年13回開催 講師:石岡ひな子特別支援教育アドバイザー
④子育てポータルサイト「おおだて子育てねっと」	<ul style="list-style-type: none"> ・メールによる「子育て相談Q&A」

4 研修や指導に生かされる資料の収集と情報の提供

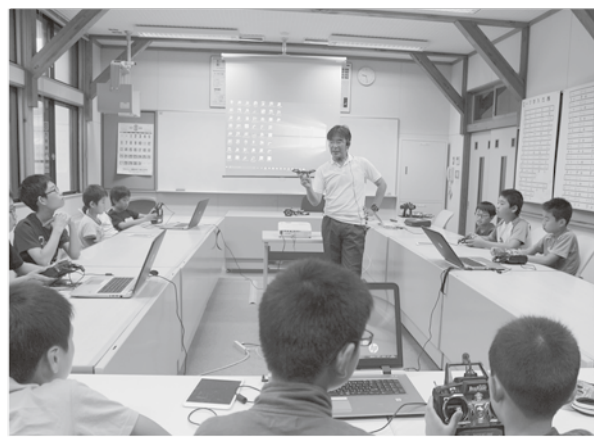
事業名	事業内容等
①資料センター事業等	<ul style="list-style-type: none"> ・教育資料活用のためのホームページ掲載 ○学校教育指導の重点(含教育研究所要覧) ○研究紀要「研」 ○所報教育おおだて ○おおだて型学力推進委員会だより「SHI・N・KA」 ・特別支援教育情報センターの開設 ○教材・教具、関係図書を整備、貸し出し ・教育専門監の授業DVDの貸し出し
②教科書センター事業	<ul style="list-style-type: none"> ・小・中・高校の教科書展示会の開催 時期:6月16日(金)~6月30日(金) 会場:中央公民館 ・教科書の整理・保管 大館教科書センター(大館市田代総合支所3階)
③研究所要覧	<ul style="list-style-type: none"> 5月発行 *学校教育指導の重点と合本 ・教育研究所の年間事業計画等

④所報「教育おおだて」の発行	年2回発行 (70号・71号)
⑤研究紀要「研」の発行	3月発行 ・教職員研究実践発表会の発表
⑥調査分析等	<ul style="list-style-type: none"> ・教育全般にわたる諸調査 ・不登校及び不登校傾向調査(毎月) ・いじめ不登校調査(6月、10月、2月) ・全国学力・学習状況調査の分析と指導改善 ・県学習状況調査の分析と指導改善
⑦生涯学習フェスティバル事業	<ul style="list-style-type: none"> ・展示期間 9月23日(土)～9月24日(日) ・園児、児童、生徒の作品展示 展示会場：中央公民館
⑧資料の発行	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもハローワーク(保護者用) ・保育のすてっぷワン
⑨郷土資料の発行	<ul style="list-style-type: none"> ・「ふるさと大館名所手帳」の配付 *対象：小学校4年生
⑩諸団体との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・教育関係機関 ・福祉関係機関 ・育ちと学び支援事業(子ども課と連携) ・北秋田地域振興局 <p style="text-align: right;">ほか</p>

◆子どもハローワーク ～夏休みの体験から～



高校見学会 H.29. 8.4
(鳳鳴高校・桂桜高校・国際情報学院高校)



ドローン教室 H29. 8.2
(東光鉄工)

◆授業力向上支援研修 H29. 8.22



◆小学校英語教育研修会



平成29年度 大館市教育研究所職員一覧

所長	貝森 逸子
所長補佐	小松原功秀
係長	篠村 朋子
指導主事	大越 章弘
主事	澤田 怜那
キャリア教育等コーディネーター	長岩亜紀子
補助事務員	船木 文子
幼児教育アドバイザー	石川恵美子
小学校英語教育推進アドバイザー	谷本 玉緒
就学事務員	畠山瑠美子
就学支援員	仲谷 香
大館おひとり教室	
指導員	菊地 俊策
	菅原 晶子
支援員	廣田 寛栄
スクールカウンセラー	佐々木百合

あ と が き

たくさんの先生方や関係各機関の皆様のご支援とご協力により、「第29回教職員研究実践発表会」が成功裏に終了しました。今年も就学前教育関係施設の先生方にも参加していただき、小・中学校の実践の他、北秋田地域振興局、大館桂桜高校、職業能力開発短期大学校、大館少年自然の家、商工課からの発表など広がりのある充実した発表会となりました。

また、今年度の全体会では、「未来に向けて進化を続ける大館の教育」と題し、教育長と学校教育課長の提言を行いました。大館ふるさとキャリア教育がスタートして7年。その頃の小学生は、未来大館を担う高校生として確実に歩き出しています。大館の10年後、50年後、100年後を見据えた教育実践がまさに、形となって表れ始めたと言っても過言ではないでしょう。それを培ってきたのは、本紀要にあるような先生方の日々の実践そして研究の積み重ねなのです。

次年度は、本市にて「育ちと学び支援事業フォーラム」、そして「秋田県学力向上フォーラム」が開催されます。特に学力向上フォーラムでは、全小・中学校公開及び参加者参加型の授業研究会という未だかつてないフォーラムを予定しています。胸を張って大館の教育を、大館の子どもたちを見ていただきましょう。

最後になりましたが、実行委員の皆様、研究実践発表をしてくださった皆様、そして、この会に参加した全ての皆様のご協力に心から感謝いたします。あわせて、大館市教職員研究実践発表会が益々発展し、教職員が主体的・協働的に力量を高め、熱意あふれる実践が「学びの交響学」となって全国へと響き渡ることを願ってあとがきといたします。